

地域研修報告書 2014



1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 ……地域研修ガイダンス

2 ……地域研修報告会

4 ……地域研修1年間の流れ・研修地一覧

6～28 ……地域研修ゼミ報告（2014年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加23ゼミ 計326名）

6 浅妻ゼミⅡ
 静脈産業と地域経済・社会
 研修地／小樽市・函館市



7 内田ゼミⅠ・Ⅱ
 浦河町におけるまちづくりリーダーのライフストーリー
 研修地／浦河町



8 大貝ゼミⅠ
 別海町における農業・観光・地域医療の振興策を考える
 研修地／別海町



9 大貝ゼミⅡ
 地域資源を活用した農山漁村の活性化を探る
 研修地／高知県中土佐町・四万十町



10 奥田ゼミⅠ・Ⅱ
 地域内連携と地域ブランドの確立
 研修地／余市町



11 小坂ゼミⅠ・Ⅱ
 地熱発電と風力発電の現状について
 研修地／森町・函館市・せたな町



12 川村ゼミⅠ
 学生アルバイトの実態
 研修地／札幌市



12 川村ゼミⅡ
 若者の雇用・労働と大学の就職支援
 研修地／札幌市



14 小田ゼミⅡ
 倶知安町の町づくり～観光開発の過去・現在・未来
 研修地／倶知安町



15 佐藤ゼミⅠ
 たら丸を通して岩内町のまちづくりの特徴を調べる
 研修地／岩内町



16 佐藤ゼミⅡ
 足寄町における再生可能エネルギーの活用実態
 研修地／足寄町



17 徐ゼミⅠ・Ⅱ
 外国人観光客誘致の実態調査
 研修地／洞爺湖町・千歳市



18 高原ゼミⅡ
 地域活性化におけるブランド農産物「らんこし米」の役割
 研修地／蘭越町



19 2部高原ゼミⅠ
 地域を支える産業と少子・高齢社会のまちづくり
 研修地／白老町



20 中園ゼミⅠ・Ⅱ
 就職困難な若者の支援—札幌大通高校を事例として—
 研修地／札幌市



21 西村ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ
 都市と漁村の結合：平成大合併10年目の検証
 研修地／函館市



22 平野ゼミⅠ・Ⅱ
 陸別町におけるフェアトレード商品を使った地域振興
 研修地／陸別町



23 古林ゼミⅠ
 サケ漁業と地域HACCPの取組
 研修地／標津町



24 古林ゼミⅡ
 日高地方における軽種馬の生産・育成・流通
 研修地／浦河町・新ひだか町・様似町・日高町



25 水野ゼミⅠ・Ⅱ
 北海道開拓当初の囚人労働を学ぶ
 研修地／月形町



26 宮入ゼミⅠ
 総合産地・富良野市農業の現状と課題
 研修地／富良野市



27 山田ゼミⅠ
 新たな展開をめざす函館の観光の取り組みを理解する
 研修地／函館市



28 山田ゼミⅡ
 湯布院（由布院）と別府という対照的な温泉街から学ぶ
 研修地／大分県由布市・別府市



29 ……現地報告・発表

2014年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長

森下 宏美



「地域研修」は、2003年の地域経済学科の創設にあたり、将来の地域の担い手を育てることを目的に新設された実践型の科目です。これまでに多くの学生が、2年次、3年次に所属するゼミを単位としながら、道内外のさまざまな地域に出向き、教室ではえられない経験と交流を積み重ねてきました。今年度は23の研修が実施され、それぞれに貴重な成果をえました。この報告書からは、今回の研修に参加した学生たちが地域をどのように肌で感じ取ったかが直に伝わってきます。札幌のような都会にはない暮らしの問題への気づき、普段は体験できない第一次・二次産業の現場での仕事、地域づくりの担い手の方々との交流、アンケートや聞き取りでの初対面の人たちへの働きかけなど、未知の経験からえた感動や問題意識が率直に語られています。これらの経験をもとに、自分の住む地域も含め、諸地域に暮らす人々の生活に対する想像力を育ててほしいと思います。

また「地域研修」は、事前学習、現地での調査・研修、結果報告という一連の流れの中で進められていきます。事前学習ではさまざまな情報を集め、課題を整理したり仮説を立てたりしながら、調査の対象や内容、方法を決めていきます。現地での調査・研修では、自らの計画に沿って主体的に調査を進めます。そして、それによって得られた知見をもとに考察し、その結果を公表します。この流れは、対象は変わっても、ものごとを探究するさいの基本的な道筋です。大学での学修を通じて、是非ともこの探究心に磨きをかけてほしいとも願っています。

北海学園大学は、創立当初から、北海道の発展に貢献する教育と研究を目指してきました。本学の開発研究所は、半世紀以上にわたって、北海道の地域に貢献するシンクタンクの役割を果たしてきましたし、一昨年には、北海学園と北海道との間に地域連携協定が結ばれました。また昨年には、地域連携推進機構を立ち上げるなど、さらに高いレベルで地域社会に貢献できる大学づくりを目指しています。経済学部もまた、「地域研修」のさらなる充実のため、地域連携推進強化事業を進めているところです。

最後になりますが、この研修を実施するにあたりましては、地域住民や自治体・企業・団体など多くの方々から、多大なご協力をいただきました。皆さまから頂戴いたしました数々のご厚意に対し、ここにあらためて、心より感謝申し上げます。

地域研修ガイダンス | 2014年4月12日 50番教室







地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学びが必要とされる複合的な学習です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

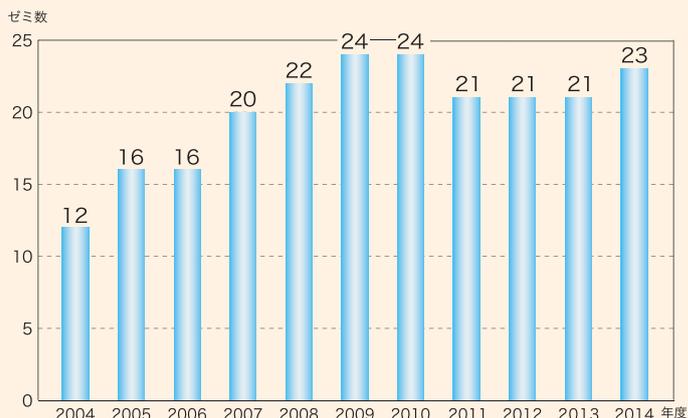
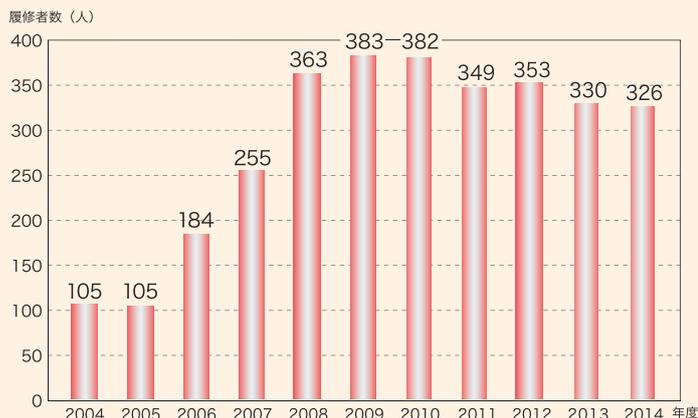
3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



1,2 地域研修ガイダンス。3 学外から講師を招いて事前学習。4,5,6 事後学習と報告会へ向けての準備。7,8 地域研修報告会でのゼミ発表と質疑。

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧



空知総合振興局管内
 A 月形町 水野ゼミⅢ
石狩振興局管内
 B 千歳市 徐ゼミⅢ

上川総合振興局管内
 L 富良野市 宮入ゼミⅠ

根室振興局管内
 M 標津町 古林ゼミⅠ
 N 別海町 大貝ゼミⅠ

C 札幌市 川村ゼミⅠ、
 川村ゼミⅡ、中園ゼミⅢ

後志総合振興局管内
 D 小樽市 浅妻ゼミⅡ
 E 余市町 奥田ゼミⅢ
 F 岩内町 佐藤ゼミⅠ
 G 倶知安町 小田ゼミⅡ
 H 蘭越町 高原ゼミⅡ
檜山振興局管内
 I せたな町 小坂ゼミⅢ

十勝総合振興局管内
 O 陸別町 平野ゼミⅢ
 P 足寄町 佐藤ゼミⅡ

日高振興局管内
 Q 日高町 古林ゼミⅡ
 R 新ひだか町 古林ゼミⅡ
 S 浦河町 古林ゼミⅡ
 内田ゼミⅢ
 T 様似町 古林ゼミⅡ
胆振総合振興局管内
 U 洞爺湖町 徐ゼミⅢ
 V 白老町 2部高原ゼミⅠ

別府市 山田ゼミⅡ

中土佐町 大貝ゼミⅡ

四万十町 大貝ゼミⅡ

由布市 山田ゼミⅡ



浅妻裕ゼミ II

参加学生数 14人



浅妻 裕

経済学科
教授

静脈産業と地域経済・社会

研修地：小樽市・函館市

【 研修目的 】

リサイクル法制の発展により、リユースやリサイクルに関わる「静脈産業」の実態が知られるようになってきた。しかし、その地域経済・社会における役割は十分に理解されているとはいえない。今回、地域と静脈産業の関連を把握すべく、特に自動車を中心に研修を行った。

■ 研修地・日程

- 7月10日 小樽市産業港湾部（ヒアリング）
小樽港視察
バンザイカンパニー（中古車輸出業、ヒアリング）
- 7月11日 二協自動車商会（ヒアリング、視察、解体実習）
クロダリサイクル（ヒアリング、視察、解体実習）
函館市リサイクルセンター（ヒアリング、視察）
- 7月12日 五稜郭公園等（視察）

【 総括 】

小樽港は輸出量の8割～9割を中古車に依存している。輸出先はほぼすべてがロシアであり、ロシアの輸入規制の関係で製造後3-5年程度経過した比較的新しい自動車が輸出される。また、関税を避けるため切断し部品として輸出されるものも多い。これらの輸出の担い手の多くが外国人であり、我々はウズベキスタン人ディーラーへのヒアリングを行った。中古車輸出は地域にとっての大きな産業となっているだけでなく外国人との共生という点でも興味深い現象である。一方、函館市では自動車の廃棄プロセスをフォローすべく自動車解体業者や鉄スクラップ業者を訪問した。使用価値が失われ、解体された自動車からは中古パーツと再生資源が生産される。かつて北海道では廃車の不法投棄も多く見られたが、現在では適正処理を行う許可制の解体業者が各地にあり、深刻な問題とはなっていない。二協自動車商会をはじめ、植樹などの地域社会貢献を行っている企業も多く「環境産業」としての位置づけを高めている。クロダリサイクルなどで生産された再生資源は韓国など北東アジアに輸出され、重要な輸出品目となっている。地域を通して資源輸出国としての日本の姿も見える。

学生研修記

大井 隆土

経済学科3年
北海道札幌高校出身

六本木 詩菜

経済学科3年
北海道高校出身

小型家電リサイクルの成果と課題

現在の日本では多くのモノが溢れており、それらが大量に廃棄されています。適切な処理がなされなければ深刻な地域環境問題となるため、健全な静脈経済の発展が求められています。またこのことは地域経済にとっても重要です。今回は特に使用後の自動車に着目しました。

訪問した自動車解体業者では自動車の修理・整理、自動車用品・部品の販売、再生資源の販売を行っていますが、その事業は単純なものではありません。例えば円安になり輸出が有利になる場合には輸出を増やしますが、為替変動のリスクを避けるために国内市場を無視することはできません。また素材の価値があがれば従来廃棄されていたようなものでも商品として流通させることができます。これらの産業はいわゆる「大企業」ではありませんが地域にとってはならない産業であるということがわかりました。

小型家電リサイクルの成果と課題

私は最初に小樽港を訪問しました。なぜ「静脈産業」がテーマなのに港湾かというと、使用後の自動車が小樽港から大量に輸出されているからです。その輸出先はほぼ100%がロシアで、小樽港の地理的な強みを生かしたものだといえます。埠頭にはハーフカット（前後に真っ二つにされた自動車）もありました。非常に綺麗に切断されていて印象的でした。これはロシアに輸入関税対策だそうです。函館で訪問した企業の方々は、レアメタルを取り出すためのパソコン解体実習や、中古パーツ生産のための自動車解体実習など、普段あまり経験できないことを準備してくださいました。事前学習ではインターネットを活用して訪問先の情報を調べましたが、現場に行ってもディスカッションや各種体験をすることで、自らの言葉でそれらの情報を語るようになることに地域研修の大きな意義があると思います。

写真キャプション ① 小樽市産業港湾部にヒアリング。② 小樽港でハーフカットを前に。③ 研修中の朝食風景。④ クロダリサイクルにて。⑤ 自動車の解体実習。⑥ 函館市リサイクルセンターヒアリング。



内田和浩ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 14人



内田 和浩
地域経済学科
教授



浦河町におけるまちづくりリーダーのライフストーリー

研修地：浦河町

【 研修目的 】

浦河町は、日高地方の中心地であるが人口減少が進んでいる。しかし、近年は移住者やUターンの若者も増えており、長年まちづくりに取り組んできたリーダーたちの存在がある。本地域研修では、前期のゼミナールⅠ・Ⅱで学んだ質的調査法によって、浦河町におけるまちづくりのリーダー層へ聞き取り調査を行い、そのプロセスを明らかにしていく。

■研修地・日程

- 8月6日 「浦河町の総合計画とまちづくり」
浦河町役場会議室（浦河町企画課）
リーダーへの聞き取り調査Ⅰ①②③
（文化会館内）
グループミーティング（文化会館内）
- 8月7日 グループミーティング（文化会館内）
リーダーへの聞き取り調査Ⅱ①②
（文化会館内）
リーダーへの聞き取り調査Ⅱ③（文化会館内）
空いているグループは、フィールドワーク（浦河市街地）
「地域デザインカフェ」への参加（文化会館内）
- 8月8日 フィールドワーク（浦河町内）

写真キャプション ① 浦河町役場にて。② リーダーへの聞き取り。③ 浦河町のフィールドワーク先で。



【 総括 】

内田ゼミは、ゼミⅠ(2年)とゼミⅡ(3年)が協力し合ってゼミ活動を行っている。今年の前期のテキスト学習では、「質的調査法の基礎」を学ぶとともに、毎回新聞記事からの優れたまちづくりの実践を紹介し合った。そして、これらの学習を踏まえて、地域研修の訪問先として今年度は浦河町を選んだ。事前学習では、浦河町のまちづくりの概要を学ぶとともに、3グループに分かれてまちづくりのリーダー3人について、それぞれライフストーリー調査を行うための事前準備を行った。地域研修では、3人の方からそれぞれ2回にわたる聞き取り調査を行った。空き時間には、グループ毎に浦河町内のフィールドワークを行うとともに、「地域デザインカフェ」にも参加して、まちの皆さんと直接語り合うことも出来た。浦河町のまちづくりの原動力であるリーダーたちが、何を考え、どんな経験や出会いから学び、どんな実践に取り組んできたのか、そして今後どんなまちづくりを展望しているのか。まさに、質的調査法を用いてそのプロセスを明らかにしていくのが、地域研修の目的であった。

このような地域研修を通じて、学生たち一人一人が地域社会で暮らす生身の人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験することが出来き、「地域社会で暮らす」ということを少しでも理解することが出来たと思う。お世話になったすべての皆さんに感謝したい。



「地域デザインカフェ」に参加して

学生 研修 記

武田 颯太郎
地域経済学科 2年
札幌国際情報高校出身



「語り」から「まちづくり」を考える

内田ゼミはゼミⅠ・Ⅱ合同で2・3年生が協力し研修を行いました。グループに分かれてレジュメを作成し、全体報告と議論をもって事前学習を進めました。併せて、研修先である浦河町についても調査・報告をすることで理解を深めました。

研修では、浦河の「まちづくり」のキーマンである3人の方々へ計2回聞き取り調査を行いました。また、町民の方々が集う「地域デザインカフェ」に参加して住民の方と交流し、町内の名所や郷土博物館を訪ねることで町の雰囲気を感じました。

調査とは言え「インタビュー」が中心であるため、2回の聞き取りで十分な内容を得ることは出来ず、事前準備の重要性や相手の言葉を引き出す力の無さを痛感しました。ただ、調査結果から「まちづくり」の変遷とリーダー層の意識変革が読み取れ、ある程度浦河のまちづくりを立体的に捉えることができたと考えています。

五十嵐 允
地域経済学科 3年
旭川大学高校出身



地域をつむぐ

私たちは今回、日高振興局管内にある浦河町を研修地として選んだ。そこで、現在浦河町の地域づくりの中心となっているリーダー層の3人の方々に、ライフストーリー法を用いた聞き取り調査を行った。どのような思いで地域づくりに関わってきたのか、そして今後、浦河をどのような町にしていきたいか、リーダー層の方々の熱い思いに触れ、深い感銘を受けた。

また、私たちは研修中、現在の浦河町で実践されている地域づくりの中心的な場である「地域デザインカフェ」に参加し、参加者の方々とお話しさせていただく機会を頂いた。そこで、過疎・少子高齢化が進み、孤立化する人が増えつつある今、人と人が繋がる場所が地域には必要不可欠であると再認識させられたと共に、この「地域デザインカフェ」は将来の浦河町を担う新しいリーダー層・担い手の養成の場になるであろうと確信した。

大貝健二ゼミ I

参加学生数 13人



大貝 健二

地域経済学科
准教授

別海町における農業・観光・地域医療の振興策を考える

研修地：別海町

【 研修目的 】

本研修では、持続可能な地域づくりをどう行するか、また観光振興による地域経済の活性化をテーマとして掲げた。これらに対して、基幹産業である酪農を対象とした酪農グループ、住民の生活視点を意識した地域医療グループ、地域独自の観光振興を検討する観光グループで調査を実施した。

■ 研修地・日程

- 8月27日 別海尾岱沼～野付半島クルージング
- 8月28日 医療グループ(別海町役場、保健センター、別海消防署)
酪農グループ(中春別農協、別海町役場、中山農場)
観光グループ(安倍公房、押田ファーム、別海町役場)
- 8月29日 別海乳業興社(施設見学、バター作り、官能検査)
医良同友(医療グループ)、アークスファーム(酪農グループ)、町観光協会(観光グループ)
別海高校にて高校生との合同ゼミ開催
- 8月30日 別海町役場にて研修中間発表会
ロマンにてボークチャップ700グラム挑戦

写真キャプション ① ヒアリング風景。② 大きな農業機械。③ 乳業興社でのバターづくり。④ 官能検査のワンシーン。⑤ 別海高校生との合同ゼミ。⑥ 別海高校生との集合写真。



【 総括 】

本研修で明らかになったのは次の諸点である。第1に、地域医療に関しては、広大な面積をどのようにフォローするのが問題となること、高齢化が進んでいる中で予防医療に力点を置いていることが調査を通じて明らかになった。また、別海町では地域医療をサポートする医良同友というネットワークを形成しているが、住民全体を巻き込んでいないために、認知度はあるが、医療に関する勉強会、講習会等への参加率が低いことなどがアンケートを通じて明らかになった。

第2に、別海町の基幹産業である酪農に関しては、経営規模拡大が進行している中で、乳牛の糞尿の処理をどのようにしていくかが課題であることがわかった。糞尿は、河川の水質汚濁に直結しており、漁業との対立を引き起こしてきた歴史を有しており、適正規模を追究する提案を考えている。

第3に、観光に関しては、「地元の人では当たり前、しかし外の人間には新鮮」な地域資源を発掘することに重点を置いた。また観光振興というときに、単に通過型から滞在型へと議論されるが、単に形式だけの検討ではなく、滞在型になると地域内の産業連関を通じて経済効果がどの程度波及するのかを、今後提案していきたい。(現地報告会の様子は29ページへ)

学生研修記

佐藤 かなえ

地域経済学科2年
とわの森三菱高校出身

現場から学ぶこと

私たちは8月27日～29日にかけて別海町を訪問しました。別海町は酪農と漁業が盛んです。また、面積は道内で6番目に広い地域で、規模で言うと香川県に匹敵します。私たちはこの別海町を酪農・医療・観光という3つのグループに分かれて研究を行いました。私は地域医療について研究を行いました。調査を通して別海町は、医療を展開するうえで広大な面積と医師が定着しづらいことが課題として挙げられていること、この課題をなんとかするために普段から「横のつながり、「連携」というものを意識的に心がけていることが分かりました。このことは、実際に現地を訪ねなければ決してわからなかったと思います。今回の研修を通して、自分の目で現場に行き、自分の目で現状を見ることがどんなに重要であるかということが分かりました。今回の経験は今後の学生生活で必ず活きると思います。

中野 倅士朗

地域経済学科2年
旭川東栄高校出身

別海町の基幹産業である酪農の調査を通じて

私たちは生乳生産量日本一のまち、別海町を訪問しました。それぞれの研究テーマに合わせて3グループに分かれヒアリング調査を行いました。別海町では大規模酪農が展開されています。私のグループでは、その大規模経営を行っている農家さんを訪問させていただき、大規模経営の強みや弱み、課題等について理解を深めることができました。

機械の導入や飼養頭数の増加により、効率的に生乳の生産量を増加させてきた一方で、適正な糞尿処理が行われておらず、その結果、環境汚染や漁業との対立を生じさせてきたのが別海町の産業の歴史である。その対策として行われていることなどをヒアリングした上で、私たちにできる政策提言を研修最終日にプレゼンするという研修でした。とてもハードな3泊4日でしたが、非常にいい経験ができたと思います。

大貝健二ゼミ II

参加学生数 10人



大貝 健二

地域経済学科
准教授

地域資源を活用した農山漁村の活性化を探る

研修地：高知県中土佐町・四万十町

【 研修目的 】

本研修の目的は、人口減少先進県である高知県の農山漁村において、全国的に注目されている地域づくりの取り組みから、そのエッセンスを吸収することである。高知県の取り組みを、北海道でも実践することは可能かどうか、地域間での比較を行いつつ検討する。

■研修地・日程

- 9月1日 高知市内交流拠点視察
- 9月2日 企画・ど礼もん企業組合ヒアリング
風工房ヒアリング
NPO法人いなかパイプヒアリング
- 9月3日 株式会社四万十ドラマヒアリング
株式会社おみさん市ヒアリング
四万十ってべんサミットオブザーバー参加
- 9月4日 宿舎（四万十楽舎：廃校利用施設）
にてManaYoheiライブ鑑賞
株式会社無手無冠ヒアリング、酒蔵見学
高知市内移動
- 9月5日 高知市内観光施設視察

【 総括 】

本研修で明らかになった点は、以下の通りである。第1に、高知県の地方部は北海道と同様に、第1次産業が盛んであることである。とはいえ、北海道とは規模も地理的条件も異なる。そのなかで、1次産品に付加価値を乗せて（加工して）製品を販売している取り組みを間近に見ることができた。第2に、付加価値とはいえ、単に手を加えるのみならず、それぞれの商品にストーリーや生産者の思いも乗せた付加価値であり、地域にあるもの（魅力）を、どのように商品として発信するのか、戦略的に練られたものであることが分かった。第3に、それでも結論として出てくるのは、結局は「人」であるということである。自分達の生活する地域をいかに良くしていくのか、といった点での10年以上の苦悩と葛藤とが現在に結びついていることも、ヒアリング調査から明らかになった。

また、近年ではU・Iターンや長期インターンを制度化しており、主に若者を対象に、四万十地域の魅力を生活しながら伝えていく、再発見していく取り組みも精力的に行われている。これらと同様の取り組みを、北海道でも実践することが可能なのかということが、学生に対して突きつけられた大きな課題となった。

学生研修記

佐藤 将貴

地域経済学科 3年
旭川凌雲高校出身

中村 祐理香

地域経済学科 3年
道愛女子中学・高校出身

足元にあるもので勝負！

中山間地域において、いかにして地域の活性化を図っているのかについて調査してきました。地方が抱える問題として都市部への集中があげられ、各地域における特産物の収穫高の維持や文化の継承が困難になっています。その中で私たちの訪問先では共通した目的を持った「人」という資源が自主的にコミュニティを形成し、「足元にある特産物」という資源を加工して地元のストーリーをふきこんだ商品を展開しているということが見受けられました。

実際に行って食べてみると実感していただけると思うのですが、どの商品についてもスーパーなどにはない「もう一度足を運んで食べに来たい！」という感動を与えてくれます。中でも道の駅「四万十とおわ」内にある「お茶栗café」で砂糖を一切使わないオール栗で作られた「四万十地栗モンブラン」は圧巻でした。

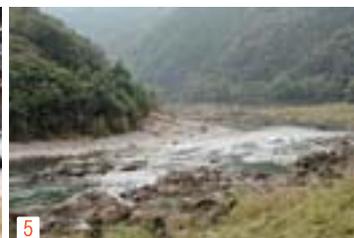
さて、皆さんの足元には何がありますか？

人生の中で何度でも話したくなるような経験

私達は、中山間地域における地域づくりの「可能性」と「人」という資源の重要性を調査する目的で、高知県の四万十町を中心に様々な場所でお話を伺いました。そこには北海道とは全然違う「田舎らしさ」があり、そこを逆手に取った販売戦略や、インターンシップ活動等の様々な取り組み、さらに北海道とは違う6次産業化への展開を学びました。そこで私たちは、地域間での人々の横のつながりの重要性和、地域資源が秘めている可能性について再認識する事ができました。

今回の研修では私達の「学びたい」という思いが伝わり、現地の人々に快く受け入れてもらえました。それが嬉しくて、本当に良い経験になったと思っています。今後は、今回学んできた高知県での様々な取り組みを「北海道にどう生かせるか」という事をテーマにゼミで議論を深めていきたいです。

写真キャプション ① ど礼もんヒアリング。② いなかパイプ佐々倉君。③ 四万十ドラマ睦地社長。④ 廃校を活用したシェアオフィス。⑤ 四万十川。⑥ 無手無冠酒蔵見学。



奥田仁ゼミ I・II

参加学生数 24人



奥田 仁
地域経済学科
教授



地域内連携と地域ブランドの確立

研修地：余市町

【 研修目的 】

全体テーマのもとでのグループごとのアプローチにより、①余市町経済の課題を認識し、具体的提言を行うこと、②訪問調査を通じて社会人としてのマナーや認識力を身につけること、③調査内容の分析・取りまとめ、④共同活動を通じた学生同士の相互理解を目標とした。

■ 研修地・日程

- 9月1日 余市町役場
8グループ各3箇所（延計24箇所）訪問聞き取り調査
- 9月2日 余市水産博物館
旧下余市運上屋
福原漁場
ニッカウヰスキー

写真キャプション ① グループヒアリング調査。
② ワイン用ブドウ畑。③ グループヒアリング調査（余市水産試験場）。④⑤ 水産博物館。⑥ 水産博物館でモッコ背負い。⑦ 下余市運上屋。



【 総括 】

余市町は古くからりんごの栽培と漁業で栄え、豊かな自然と多様な産業を発展させてきた。しかし他方では、従来から地域内の産業間の連携が十分とはいえないことが指摘され、余市町発展の課題とされてきた。本学経済学部の先輩である嶋町長が掲げる「6次産業化」もこのことを意識したものと考えられる。

おりしもNHKの朝ドラマで余市が取り上げられ、全国的に注目されつつあるが、これを一過性のものとするのではなく長期的に余市町の「地域ブランド」の確立に結びつけることが、地域内産業の連携した発展をもたらすという視点から、24人の学生が8グループにわかれ、グループごとに小テーマを持って、それぞれ独自の訪問聞き取り調査を行った。小テーマは①余市町水産業、②余市観光の可能性～マッサンを起爆剤に～、③余市町の農業—6次産業化、④「くだもの里」からみた余市町、⑤商店街からわかる余市町の展望、⑥余市と会津藩の歴史、⑦観光を通じた余市町の地域振興、⑧北のワインぶどう王国よいち、である。各グループがこれらをプレゼンテーションと論文にまとめ、現状分析と提言にまで結びつけており、当初の研修目的はほぼ果たされたと考えられる。

学生研修記



阿久津 智
地域経済学科2年
栃県烏山高校出身



加藤 瑞季
地域経済学科3年
室蘭栄高校出身

地域研修を終えて

私たちは1泊2日で余市町に研修に行き、観光、余市町の歴史、果実、漁業、ワイン、ウイスキーなどそれぞれのグループで決めたテーマについて学習しました。研修1日目はグループに分かれ、各グループのテーマに基づいた企業を訪れお話を伺いました。2日目はゼミ全体で、国指定史跡の旧下ヨイチ運上家、旧余市福原漁場や、ニシン漁の漁具などの郷土資料が展示されている、よいち水産博物館を訪れ貴重な展示物を見て余市町の歴史に触れることができました。次にニッカウヰスキー余市蒸留所を訪れウイスキーができるまでの工程を見学し、最後にウイスキーなどの試飲ができとても楽しかったです。

研修に行く前は、余市町にはワインやウイスキー、果実くらいしかないと考えていたけれど、その他にも漁業や歴史など様々な魅力があることを今回の研修で知ることができました。

地方のまちづくりを考える

私たち奥田ゼミナールは今年地域研修先として余市町を訪問しました。8つのグループに分かれ、水産業、果樹栽培、ニッカウヰスキー、マッサン（現在放送中のNHK朝ドラ）等のテーマごとに調査活動を行いました。私のグループは「くだもの里から見る余市町」をテーマに余市町を代表とする果樹園「山本観光果樹園」と「あさだ園」、余市農業協同組合の3カ所で調査を行いました。実際に訪問してみて余市町の町の雰囲気や町民の方の人柄に触れることができ、事前調査では得られなかった経験をすることができました。また、余市町の基幹産業の現状や課題を知ることができ、まちづくりを考えるうえで重要な研究テーマを見つけることができました。この経験はのちの就職活動にも役立つものになったと思います。



小坂直人ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数32人



小坂 直人

経済学科
教授



地熱発電と風力発電の現状について

研修地：森町・函館市・せたな町

【 研修目的 】

今年のゼミでは、前期に原子力エネルギーと再生可能エネルギーの実情と将来の可能性について学んできたが、今回の地域研修では、そのうち、森地熱発電所とせたな町の洋上風力発電を実際に見学することによって実情を再確認し、併せて大間原発をめぐる建設差し止め訴訟について市の担当者より説明を受け、理解を深めた。

■研修地・日程

9月1日 北電森地熱発電所
9月2日 函館市役所
せたな風力発電所

写真キャプション

- 1 森地熱発電所前で。
- 2 森地熱発電所 事前説明。
- 3 森地熱発電所 制御室。
- 4 函館市役所。
- 5 せたな風力発電所前で。



【 総括 】

福島原発事故以来、わが国においては、原子力に代わるエネルギーとして再生可能エネルギーに大きな期待が寄せられている。とりわけ、北海道は風力、太陽光、バイオマスをはじめとした再生可能エネルギーの賦存がきわめて豊富であり、さながら再生可能エネルギーの宝庫であるかのように語られている。私たちは、その意味を文献的に学習するとともに、実際に現地に足を運ぶことによって、その意味を確認することとした。今回選んだのは、森地熱発電所とせたな町の洋上風力発電所である。地熱発電所の担当者からは、地熱発電の技術的困難さが伝えられ、今後の課題の大きさが実感された。瀬棚洋上風力については、港の防波堤内部の洋上であり、本来の洋上風力の開発までには、やはり難しさが残っていることが確認された。いずれにしても、再生可能エネルギーの本格的開発にはまだ資金や技術力の投入が必要であることがわかる。東日本大震災と福島原発事故は発生から3年を過ぎた今も、廃炉と除染および核廃棄物処理を含む事故処理全体がいつ終わるとも分からない状態である。避難を続ける福島県民は13万5千人以上と県当局が発表している。現状の福島原発事故対応は県民にとって何等の解決になっていないし、その見通しも見えないというのが率直なところである。

他方、政府は原発再稼働と原発輸出に前のめりである。エネルギーと原発をめぐるこのような情勢下で、自治体はエネルギー・原発問題にいかなるスタンスで対応すべきなのか、住民の生存配慮を使命とする自治体が今なすべきことについて、慎重な議論が必要な時である。このたびの地域研修では、大間原発をめぐる建設差し止め訴訟における函館市の対応について実際の担当者より話を聞くことによって、ゼミ員一同の認識を高める機会となった。



学生研修記



田中 滉貴
経済学科2年
北海道出身

小坂ゼミの函館研修記

私たち小坂ゼミは、2泊3日で函館へ研修旅行へ行ってきました。あくまでも研修目的ではありませんでしたが、とても楽しみながら学ぶことができました。発電所に焦点をあてて行ってきたのですが、そこで、地熱発電、風力発電のメリット・デメリットについて学び、それぞれのよし悪しから、私は洋上風力が今後、日本で活躍してくれるのではないかとオモッテマス。洋上風力は、陸上の風力のデメリットを補うことができるからです。また、2日目には、函館市役所を訪れ、大間原発の訴訟問題について話を聞いてきました。原子力発電を使用することで公害が起きるのは避けられないのは知っていましたが、そのことにより訴訟まで起きていることは、この地域研修で初めて知り、これからも注目していかなくてはならないと感じました。



富原 彩乃
経済学科2年
函館中部高校出身

函館研修を通じて

今回の研修では森地熱発電所、瀬棚風力発電所の見学と函館市役所で大間原発訴訟の経緯について話を聞きました。森地熱、瀬棚風力の二つの発電所では、それぞれの発電の仕組みや施設の見学、現状やデメリットについて学びました。地熱、風力ともに自然環境に優しいクリーンなエネルギーであるというメリット、反対に周辺環境との調和を図らなければいけないというデメリットがあります。しかし技術発展により改善されていくと考えられるので、今後も注目したいと思います。函館市役所では、立地自治体でないとの理由で、事業者が同意を得ずに大間原発建設を再開したことなど、訴訟に至る経緯を聞きました。原子力発電所の事故の際の被害の大きさを考えると、周辺自治体の同意を得ることは重要だと思えます。

川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数16人



川村 雅則

経済学科
准教授

① 学生アルバイトの実態

② 若者の雇用・労働と大学の就職支援

研修地：札幌市

【 研修目的 】

今年は、①例年同様に、北海学園生のアルバイト実態を調査したほか、②若者の雇用・労働と大学の就職支援の現状を調べてみた。

前者では、「ブラックバイト」という言葉に象徴されるとおり、学生アルバイトの雇われ方・働かせられ方のひどさが社会問題として浮上してきたいま、あらためてその実態を調べ、必要な対策の検討を目指した。

後者では、まず若者の雇用・労働実態を学んだ。学べば学ぶ（知れば知る）ほど、労働市場へ若者を送り出す大学など教育機関が、学生が在学中に果たすべき役割があるのではないか、という思いが強くなった。そこで、大学の就職支援の現状を学び、かつ、問題を提起してみた。

両研究とも、労働組合のご協力を得た。労組を講師に招いたり、逆に、労組の事務所をゼミで訪問して、学習を重ねた。御礼を申し上げる。

■ 研修地・日程

研修先・協力先

- 札幌地域労組（札幌中小労連・地域労組）
- 道労連（北海道労働組合総連合）

前期

- 若者の雇用・労働や労働法に関する学習
- 並行して、学生のアルバイト調査を開始
- ゼミで労働組合を講師にお招きしたり、労働組合主催の学習会に参加して学ぶ

夏期休業中

- ゼミⅠは、労働組合を訪問して学習
- ゼミⅡは、福岡大学で12月に開催予定のインターゼミナール（インゼミ）大会に向けた準備を開始

後期

- ゼミⅠは、学生アルバイト調査結果のとりまとめ作業。12月に『学生アルバイト白書2014』が完成
- ゼミⅡは、研究テーマ（「若者の雇用・労働と大学の就職支援」）にそって、労働組合や大学のキャリア支援センターを訪問し、聞き取り調査（10月）。インゼミ大会に参加して、若者の雇用問題とその解決策について、中央大学のゼミと討論を行う（12月）

【 総括 】

①学生アルバイト調査と、調査結果にもとづく『白書』づくりは、今年で4年目になる。キャンパスライフのうち少なからぬ部分がアルバイト生活に費やされているが、相変わらず、バイト先でのワークルールの軽視が目立つ。不払い労働にはじまり、仕事上のミスへのペナルティ、商品の買い取り・ノルマ、急な呼び出し・シフトの変更、パワハラ・セクハラなどなどである。労働法を学んだだけでは事態の解決は難しい。そう考え、労働組合なら問題をどう解決するか学んだ。詳細は『白書』を参照。→ <http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index> からダウンロード可能

②若者の雇用・労働実態について、テキストのほか、労働組合からのリアルなお話し——例えば過労死ラインを超えるような働き方・働かせられ方など、学生には驚きの実態——で学んだ。同時に、労働



学生研修記

大竹 健太
経済学科2年
室蘭栄高校出身坂田 亮
経済学科2年
石狩南高校出身

学生アルバイトの危機

私たちは、学生アルバイトの現状について調査をして、その対策・改善策を検討してきました。調査からは、「ブラックアルバイト」と呼ばれるような働き方をしている学生が少なくないことが明らかになったのですが、労働法を学んで、「これが対策だ!」と言われても正直なかなか実感が湧きませんでした。そこで、労働組合を訪問し、まずは自分たちが調べたり学習してきたことを発表し、その上で、労働組合なら問題をどう解決するか教わりました。労働組合への労働相談でも、サービス残業や不当な解雇、パワハラなどに苦しむ若者が多く、しかも、労働法についての知識不足や仕方がないというあきらめで働き続けている人が多いそうです。学生バイトにも共通するこうした現状の対策を専門家とともに考えられたことはとても貴重な経験になりました。

「ブラックバイト」に直面する学生

現在「ブラックバイト」が社会問題になっています。私たちはそうした、学生のアルバイトについての調査を行ってきました。

まず、本や新聞などで、ブラック企業など若者の雇用・労働の現状や労働法を学びました。その上で、北海学園生に、アルバイトの実態の聞き取りを行い、いろいろ明らかになった問題に、どう対応したらよいかをゼミ内で何度も繰り返し考えてきました。夏休みには、労働組合の事務所を訪問して、専門家の「目線」でのご意見をいただきました。

調査では、賃金未払いやシフトの一方的な変更などいろいろ問題が明らかになりました。多くの学生は問題にどう対応すればよいかかわからずに働いていると思います。「ブラックバイト」に負けられないためにも、一人でも多くの学生に、私たちの作成した『アルバイト白書』を読んで欲しいと思います。



1



2



3



川村ゼミI (左から2人目は講師の札幌地域労組 鈴木一氏)



川村ゼミII



インゼミ大会、今年は福岡大学へ乗り込みました



インゼミ前夜、宿泊先で作戦会議を



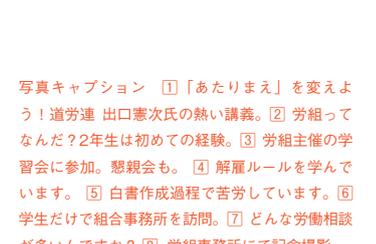
それでもインゼミ当日は四苦八苦



団結剣を伝授に労組が来校



労働組合のリアルを受講



者（相談者）の側に、労働法の知識や問題への「構え」が十分でないことが、事態を悪化させてしまっていることを学んだ。若者を送り出す私たち教育機関にも課題があるのではないかと考え、大学のキャリアセンターを訪れ、学生の就職活動や就職支援の現状を教わった。

調査では、センターで行われている各種の支援策・内容のほか、学生に対する職員の親身な対応を学んだ。だが同時に、内定率だけでは見えてこない就職未決定者（無業者）の存在や、労働トラブルへの対応など就職後を見据えた支援については必ずしも十分ではないといった課題が明らかになった。これらは全学的あるいは個々の教育機関を超えた課題でもある。

以上の調査結果を、論文にまとめ、12月6・7日に福岡大学で開催されたインゼミ大会に参加。中央大学のゼミと、若者の雇用問題とその解決策について、討論を行った。

学生研修記

河端 由実
経済学科3年
札幌月寒高校出身



能登屋 純
経済学科3年
札幌光星高校出身



「インゼミ、討論の末に」

私たちのゼミでは、12月に福岡大学で開催された日本学生経済ゼミナール大会に向けて、勉強を重ねてきました。具体的には、労働組合と大学のキャリア支援センターからの聞き取り調査を行い、若者が直面している雇用トラブルやその解決法に加え、大学の就職支援の現状や課題を学んできました。これらの調査結果や先行研究をもとに論文を作成して、インゼミ大会で中央大学のゼミ生と討論し、このテーマについての理解を深め、視野を広げました。

私たちは論文で、ワークルールや労働問題の解決事例などを在学中に学ぶような機会をつくるのが重要だという結論を出しました。でも今回の討論で、学校の支援だけではなく国全体の政策にも目を向けなくてはならないことがわかりました。討論では様々なことに気付かされ自分たちの勉強不足を痛感しました。でもとても貴重な時間を過ごせたと思います。

「若者の雇用と就職支援の現状」

近年、非正規雇用者の増加やブラック企業問題など、若者の雇用における問題が深刻化しています。そこで私たちのゼミでは、労働組合と北海学園大のキャリア支援センターに聞き取り調査を行って、その結果をまとめました。

労働組合への聞き取りでは、若者からの労働相談が多いことや、相談内容も、残業代未払いや労働契約に反した問題など様々であることを教わりました。問題解決にはやはり1人ではだめで、大勢で団結権を行使することが不可欠であると感じました。

キャリア支援センターでは、各種のセミナーを開催したり、求人の紹介やインターンシッププログラムの実施など、様々な支援が行われていることを知りました。自分の大学のことながらこうした機関・支援メニューの存在を知りませんでした。納得した人生を送って欲しい、という思いで学生を支援している、という職員の方のお話しが印象的でした。



小田清ゼミⅡ

参加学生数 11人



小田 清
地域経済学科
教授



倶知安町の町づくり～観光開発の過去・現在・未来

研修地：倶知安町

【 研修目的 】

今回の地域研修テーマは「倶知安町の町づくり～観光開発の過去・現在・未来」です。その目的は、近年、倶知安町ヒラフ地区を中心に急増している外国人観光客の動向とその宿泊施設コンドミニアムについて、その現状とどんな問題点があるかを学ぶことに置きました。

■ 研修地・日程

- 8月21日 倶知安町役場企画振興課
倶知安町ヒラフ地区・コンドミニアム（北海道トラックス・デベロップメント）
- 8月22日 NAC（ニセコアドベンチャーセンター）ラフティング体験（尻別川にて）
倶知安町郷土資料館「風土館」

【 総括 】

全国でも屈指のスキーリゾートエリアとして知られる倶知安町ヒラフ地区は、10年以上も前からオーストラリアを中心に、スキー利用客が増加していた。季節が日本とは真逆のためのスキーツアーである。そのオーストラリア人インストラクターが通年観光として開いたのが尻別川のラフティングである。これらによって、夏・冬ともに開かれた国際観光地となり、さらに外国人利用者が増加した。彼らの宿泊施設は、以前から存在していたペンションやホテル、貸しコテージ等であった。

近年のヒラフ地区利用は、オーストラリア人が減少し、代わって中国本土や台湾、韓国人が増加した。彼らの宿泊施設として、長期滞在型・賃貸のコンドミニアム建設が急増し、ペンション等の廃業が顕著である。建設者は日本資本の他に、中国資本もかなり多い。

そこでの問題点を探るべく研修を行った。特に外国資本は投機的な意味合いを込めて建設を行っているため、撤退した後の「後始末」問題や高層による自然景観の破壊などが心配される。いかに持続的に国際観光化を図るかが問われるのである。



NACでのラフティング体験



ヒラフ地区のコンドミニアム

学生研修記

- 写真キャプション ① 倶知安町役場にて講話風景。
② 倶知安町役場庁舎前・新幹線開業決定の看板。
③ 倶知安町内のレストランメニューは英語表記。
④ 羊蹄山をバックに。⑤ コンドミニアムYAMA-SHIZEN副社長 大久保実氏の講話。⑥ 郷土資料館にて「戦前のゼロ戦・倶知安町で着氷実験」写真。



1



2



3



4



5



6



西尾 匡人
地域経済学科3年
北海高校出身

倶知安町ヒラフ地区・コンドミニアム視察感想記

私たちは1泊2日の日程で倶知安町を訪れ、地域研修を行いました。倶知安町については、TVやニュースなどで少しは見たり聞いたりしたことはありましたが、実際にどんな町なのかは研修に行くまでは知りませんでした。行ってみると、様々な特色のある町であることが判りました。

町役場では、特に観光開発や北海道新幹線による倶知安駅の開業等を中心に、ニセコ町や周辺地域との連携の重要性を説明して頂きました。中でも、外国人観光客・利用者が増加している今日、どの国の

利用者にも通用する国際的な規則制定について様々な努力を行っていることが判りました。

外国人観光客が増加している理由としては、雪質がとても良いスキー場の存在、欧米と比較して渡航費が安い、治安等安全性が高いなどがあげられ、これが海外に口コミで広がり、ニセコ地域が世界から注目を集めているとのことでした。

この海外観光客向けに急増しているのがコンドミニアムという賃貸宿泊施設です。コンドミニアムとは、夏・冬期観光に訪れる外国人が格安で利用できる長期賃貸マンションのことで、この運用状況についてオーナーに話しをしてもらいました。夏の間も各国からの利用者で賑わっているそうですが、特に、スキーシーズンが近づくと、予約で満室になるそうです。今後、コンドミニアムの建設はさらに増加するとのことでした。ニセコプームはこれからも続くのではないかと感じました。



佐藤 信
地域経済学科
教授



たら丸を通して岩内町のまちづくりの特徴を調べる

研修地：岩内町

【 研修目的 】

本研修では、まちのマスコットキャラクターを軸としたまちづくりの特徴を知るために、「たら丸」で知られる岩内町を訪問し、観光協会でのインタビューを行うとともに、住民アンケートを実施して、たら丸の認知度やこれからの課題を明らかにすることとした。

■研修地・日程

- 9月8日 岩内観光協会
たら丸館
- 9月9日 岩内町郷土館

【 総括 】

岩内町のマスコットキャラクター、現在では「ゆるキャラ」とも呼ばれる「たら丸」は、1985年に誕生した。その後、数多くのTV出演を行うなど全国的に知られている。そのたら丸は、現在、まちづくりにどのように貢献しているのだろうか。そして町民はたら丸に対して、どのような思いでいるのだろうか。本ゼミでは、以上の問題意識をもって岩内町を訪問した。

ヒアリング先の岩内観光協会は、道の駅いわないと隣接しており、たら丸館も道の駅内にある。たら丸館では、様々なたら丸グッズを販売しているし、入り口には今年から大きなたら丸像が置かれるようになった。このたら丸像は、補助金を得て作られており、自治体と密接な協力関係にあることも分かる。たら丸は、電柱やマンホールのフタ、掲示板など様々なところで見ることができる。住民アンケートの結果でも、認知度は100%であるし、9割近くがまちづくりに貢献していると答えてくれた。ただし、まちづくり全体として見れば、課題が残ることも明らかとなった。

今回の研修は、聞き取り調査に加えて、ログハウスでの自炊となった。当初不安もあったが、買い出しや炊事、後片付けまでゼミ生間で役割を分担し、首尾良くすすめることができた。

学生研修記

写真キャプション ① 観光協会で説明をうける。
② 観光協会の松田さん。③ たら丸グッズ。④ マンホールのふた。⑤⑥ 町内でインタビュー中のゼミ生たち。⑦ 郷土館の坂井館長から話をきく。



金本 祐希
地域経済学科 2年
苫小牧南高校出身



地域研修に参加して

私たちのゼミでは、ゆるキャラを活かしたまちづくりをしている岩内町に行きました。1日目は、観光協会に訪問し、ヒアリングをしました。ゆるキャラであるたら丸が誕生したことにより、商店街での共同作業が増え、町の雰囲気が良くなったことを知りました。また、グッズの売り上げも良好で町に貢献していることがわかりました。2日目は、郷土館を見学した後に町内でたら丸に関するアンケート調査を行いました。郷土館では、岩内町の歴史を学び、漁業に富んでおり栄えていた様子がうかがえました。アンケート調査の際、町内を移動していると、たら丸がマンホールやシャッターなどに描かれており、知らない人はいないようでアンケート調査の結果からも認知度が高いことがわかりました。今回の研修で、ゆるキャラが町の活気につながっていることを学ぶことができました。

近藤 南渚
地域経済学科 2年
北海学園札幌高校出身



岩内のまちづくりの経過と活性化

私たちは、岩内町のまちづくりの特徴を調べることをテーマに、ご当地キャラクターのたら丸の役割について研究を行いました。まず初日に観光協会を訪問させて頂きヒアリング調査を行いました。調査の結果、岩内町をPRすることで経済効果や町の変化があることがわかりました。たら丸を起用し、岩内町外でのイベント等に参加することによって、岩内町をPRし、またグッズ販売によっても実際に集客効果を高め、まちの活性化へとつながっていることがわかりました。

2日目には、町民の方々にアンケート調査を行い、たら丸誕生前と後では商店街の雰囲気も変わり、まちが賑やかになったこと等から、まちづくりに貢献しているのではないかと結果も得られました。

今回、岩内町の歴史やまちづくりの経過を深く知ることができ、様々な人々と出会い、大変有意義な研修となりました。

佐藤信ゼミ II

参加学生数 15人



佐藤 信

地域経済学科
教授

足寄町における再生可能エネルギーの活用実態

研修地：足寄町

【 研修目的 】

本研修では、北海道における再生可能エネルギーの可能性を知るために、次世代エネルギーパークの認定地域となっている足寄町を訪問し、認定に至るまでの歴史を学ぶとともに、木質バイオマス利用施設や木質ペレット製造工場、温泉熱利用施設、ペレットストーブショールームを視察し、それらの特徴や課題を学ぶこととした。

■ 研修地・日程

9月4日	足寄町役場 木質ペレット製造工場
9月5日	足寄町総合体育館 マルシヨウ技研(株)ショールーム

写真キャプション ① 役場で説明を受ける。② 木質ペレットの山。③ ペレット工場は廃校の体育館を利用。④ 役場の村石さんに話を伺う。⑤ 地熱で暖房を行っている体育館。⑥ ペレットストーブ各種。⑦ ペレットストーブのショールームで話をきく。



1



2



3



4

【 総括 】

将来の北海道において、再生可能エネルギーは地域経済の発展にどのように貢献できるか。そして、それを制約する条件は何か。地域研修では、以上の課題をもちつつ、足寄町役場庁舎での学習と町内各施設の視察を行った。

足寄町は、森林資源に恵まれている他、家畜ふん尿や温泉熱など、再生可能エネルギーを導入するのに適した地域である。特に、木質ペレットについては、廃校を製造工場として活用し、原料供給から販売までの過程を協同組合方式で行うなど、他地域では見られない特徴がある。また、製造した木質ペレットを町内で消費できるようにペレットストーブの販売拡大もすすめていた。再生可能エネルギーの取り組みによって域内の雇用が拡大している点は何よりも印象に残った。

今後、ペレットストーブの普及や温泉熱の利用促進など課題は残るものの、再生可能エネルギーの一層の域内普及による経済波及効果に期待の持てる事例であった。

ゼミIIの学生たちは、事前の文献学習に加えて、グループごとに設定したテーマに従って、視察場所では熱心に質問を行っていた。十勝名物の豚丼や携帯電話が全く繋がらない温泉宿など、初めての経験もあったようである。昨年と比較して、1年間の成長が自他共に確認できた研修であったと評価できる。

学生研修記



鹿嶋 崇宏

地域経済学科3年
大麻高校出身

齋藤 晃輝

地域経済学科3年
大麻高校出身

エネルギーパーク 足寄町

再生可能エネルギーを実際に導入している市町村から話を聞くために、佐藤ゼミIIでは足寄町に行ってきました。

足寄町は地域経済の活性化を目的として、再生可能エネルギーを取り入れており、木質ペレットの生産や温泉熱の暖房利用を行っています。これらのエネルギーはまだまだ発展段階なので、事前に調査を行い、失敗を重ねながらの導入となっていました。廃校になった中学校を活用したり、役場を町有林で建てたりなど、まさに地産地消、今現在あるものを利用していくという方針となっており、環境にももちろんやさしい町となっていました。他にも、取り組みは調査段階のものも多くあったので、今後の展開にも注目していきたいです。

足寄町次世代エネルギーパークを訪ねて

今回の地域研修では、足寄町における再生可能エネルギーの活用実態を調査するため、資源エネルギー庁の「次世代エネルギーパーク」に認定されている足寄町の町役場庁舎や木質ペレット施設など再生可能エネルギー関連施設を視察しました。

役場庁舎でのヒヤリング調査においては、足寄町における様々な新エネルギーの取り組みについて話を聞くことができました。私たちがからの「なぜペレットなのか」という問いには「CO²抑制」という環境面はもちろん、「十勝の豊富なカラマツ資源を生かして、地産地消すること、地域循環することを重視するため、ペレットのコストは高くても良い。続ける。」という力強い回答をいただきました。地域資源の利用拡大による地域内循環の増大をめざす足寄町のぶれない地域振興の考え方を感しました。



5



6



7

徐涛ゼミI・II

参加学生数 11 人



徐 涛
地域経済学科
教授



外国人観光客誘致の実態調査

研修地：洞爺湖町・千歳市

【 研修目的 】

外国人観光客が急増するなか、道内の観光地と商業施設における外国人誘致の現状と課題を調査し、地域経済に与える影響を考える。今年、洞爺湖（洞爺湖温泉観光協会）と千歳（千歳アウトレットモール・レラ）で研修を実施した。

■研修地・日程

- 10月3日 洞爺湖温泉観光協会にて佐々木清志事務局長より外国人観光客誘致事業紹介
温泉街見学
- 10月4日 千歳アウトレットモール・レラにて鈴木靖彦副支配人より外国人観光客誘致の取り組み紹介と関連施設の紹介
レラ見学

【 総 括 】

洞爺湖温泉では外国人観光客が増加し、客単価も上昇した反面、旅館の部屋数や人手が不足している。しかし、ショッピングなどに、佐々木清志事務局長によれば、韓国人などを受け入れるつもりがないホテルは未だに複数存在するそうである。さらに、講演で立ち上がって身振り手振りで韓国の若い女性観光客の「超ミニスカート」姿を描写し、LCCで中国人と大喧嘩した武勇伝を熱心に述べるこの方のご様子に私たちが圧倒された。「おもてなし」とのギャップがあまりにも巨大であった。

レラの鈴木靖彦副支配人は、千歳市をはじめとする北海道の地域振興のために、レラはタイ、中国、マレーシアなど急伸びしているアジアからの観光客の誘致に真摯に取り組んでいることを具体的に紹介した。学生たちは「レラを応援しなければ」と鈴木さんの熱意から感銘を受けた。その後、商業施設初の礼拝室などの施設見学と4D映画体験など充実した研修内容を実施した。

大きな経済効果を有する外国人観光客を「ゆうこう」に利用しない手はない。しかし、友好的姿勢があってはじめて来日客の資源を有効に生かすことができるのではなかろうか。

学生研修記

島崎 篤也
地域経済学科 2年
旭川西高校出身



松岡 有希
地域経済学科 2年
旭川凌雲高校出身



「レラ」のおもてなしとは？

千歳のレラは、札幌に程近い三井アウトレットとの競争を強いられています。そこで導き出された対策はファミリー層の呼び込みと、外国人への徹底的な売り込みや外国人観光客の歓迎姿勢の工夫でした。私はレラに行くのは初めてだったのですが、実際に注意深く見学してみると、施設内の至る所の案内表示に何か国語もの外国語表示がされていたり、現地の方々に最大限配慮された礼拝所があったりなど、私が今まで訪れた様々な施設の中で最も外国人客に対する配慮が細かくされていて、とても驚かされました。あとこれは余談ですが、新しい施設である「4D王」シアターはとてもクオリティが高く、誰にでもお勧めできると思います。

洞爺湖でも花火大会の質の向上やスポーツイベントの誘致などを行っています。洞爺湖は飲食店が少ないなど、受け入れ態勢がまだ十分とは言えないのが現状です。

洞爺湖温泉の現状！

洞爺湖温泉観光協会を訪れ、事務局長から外国人観光客誘致をテーマにお話を伺いました。序盤にははっきりとイベントをやらないと人は来ないと言われ、持っていたイメージを崩されました。特に力を入れているイベントは、5月から10月にかけて毎日行われる花火のようです。従来花火業者1社が請負った事業を2社に交互に実施させ、コスト削減とサービス向上に努めました。しかし、ホテルがかなり古くなり、温泉街では多くのシャッターの降りた店が目につくのが現状です。その方の紹介によれば、韓国人を受け入れないホテルもあるそうです。最も印象に残ってしまったことは、その方が外国人との喧嘩を意気揚々に紹介したことです。本当に観光客誘致現場のトップなのかと疑ってしまいました。

写真キャプション ① 洞爺湖温泉観光協会での講演会。② 真面目に観光協会の佐々木さんの講演を聞く学生たち。③ レラでの免税案内と中国語の割引案内。④ レラにある礼拝堂。⑤ レラをロケ地として使った台湾ドラマのポスター。⑥ 「4D王」シアター看板。⑦ 「4D王」シアター見学。



高原一隆ゼミ II

参加学生数 12 人



高原 一隆

地域経済学科
教授



地域活性化におけるブランド農産物「らんこし米」の役割

研修地：蘭越町

【 研修目的 】

これまでの小麦ネットワークやご当地グルメを対象にした研修から、今回は「米」という素材を対象に、それが地域活性化にどのような意義を持っているかについて、今評判の米生産地・蘭越町を対象にヒアリングやアンケートを通して明らかにする。

■ 研修地・日程

- 9月2日 蘭越町役場（宮谷内留雄町長より合併を選択しなかった理由のヒアリング、産業経済課）
JAようてい蘭越支所
- 9月3日 町内施設の視察（玄米バラ受調整施設、育苗施設など）
向山農場、川崎農場
飲食店へのアンケート
- 9月4日 Aコープ蘭越店
港シェルプラザ「貝の館」
黄金温泉にてヒアリング

【 総括 】

高原ゼミは北海道において地域経済活性化をどのように進めるかという問題意識で研修を行ってきた。そして、北海道においては活性化のポイントは食及び食関連産業であるとの認識からこうした産業や地域経済活性化システムを研修を通して獲得しようとしてきた。

これまで小麦及びそれを活用した経済ネットワークやご当地グルメを対象にヒアリングやアンケートを行ってきたが、今回は日本人の主食である「米」を対象にしようと雰囲気盛り上がり、さらに議論を通して、道内のみならず全国的にも評価が高まりつつあるらんこし米生産地域である蘭越町にて研修を行うことにした。

研修先でのヒアリングはオーソドックスに米生産のための支援施設及び地域の主要団体である町役場、JAそして米農家に対して行った。さらに、らんこし米を使用している飲食店へのアンケートを行い、らんこし米がどのような効果を発揮しているかについて明らかにしようとした。また、米以外にどのような側面をもった地域であるかを知るため温泉施設やその他施設を視察した。

報告にまとめる段階の議論では、確かに、農業関係者やそれを使用している経済団体にとってはらんこし米の効果は少なからぬものがある。しかし、それを農産品としての米にとどまらず、この米をもっと多様に活用すべきではないかとの結論に達し、おいしい米であるらんこし米をさらに高いブランドにしていくと同時に、これを活用して「ご当地グルメ」を考案し、それによって他地域からの交流人口を増やしていくことが重要ではないかとの提案に至り、そうした提案を押しだした報告を行った。

学生 研修 記



野村 泰斗

地域経済学科3年
札幌藻岩高校出身



久重 留菜

地域経済学科3年
登別青嶺高校出身



「米どころ蘭越」の地域活性化への可能性

9月2日～4日までの3日間、私たちは蘭越町に地域研修に行きました。これは蘭越町で生産されるらんこし米が美味しいとの評判があるということを知ったからです。そこから、らんこし米が何故美味しいのか、そしてらんこし米によって蘭越町は地域経済の活性化が図られているのか、この2つについて興味を持ったからです。

蘭越町に行き、宮谷内町長、蘭越町産業経済課やJA ようていの担当者様からお話を聞くことができ、また実際にらんこし米を生産している現場の農家さんや町内で営業をしている飲食店様からお話を伺うことができました。この3者には、実際に地域活性化ができていないか否かについてのスタンスの違いがあるものの、らんこし米に対して持っている想いを知ることが出来ました。そして全体を通じてらんこし米を中心とした地域活性化にはまだまだ課題があることがわかりました。

足寄町次世代エネルギーパークを訪ねて

私たちは9月2日～4日にニセコ町近くにある蘭越町を訪れました。地域研修では、幽泉閣という温泉施設に宿泊し、食事は「ほしのゆめ」「ななつぼし」が出され、両方の味を食べ比べることが出来、ときびや蘭越メロンなどもサービスしてくれました。飲食店訪問では、地域内のお客さんが大半であるということが現状であり「蘭越町、蘭越米を知ってほしい！」という声もありました。そこで私たちは地域活性化をお金が動くことであると定義し、解決策としてはB級グルメを作ることで地域外からの人も増え蘭越町にお金が落ち地域活性化に繋がると考えます。蘭越町で作られる蘭越米は「ぐるナイ」でも取り上げられた程の日本一のお米であり、お米以外にも振興作物であるトマトやメロンも本当に美味しく、なによりも地域の人はとても温かい人たちです。蘭越町には是非足を運んで見てください。驚きと感動が待っています！

写真キャプション ① 役場でヒアリング後、宮谷内留雄町長と。② 役場産業経済課担当者から「らんこし米」の経済効果の説明。③ 玄米バラ受調整施設を視察。④ 「らんこし米」生産農家を視察。

2部 高原一隆ゼミ I

参加学生数8人



高原 一隆

地域経済学科
教授



地域を支える産業と少子・高齢社会のまちづくり

研修地：白老町

【 研修目的 】

まちづくりにはハードな面とソフトな面とが必要であるが、それを最も体現している白老町での視察・ヒアリングを通して、ハードなまちづくりとは何で、ソフトなまちづくりのとは具体的にどのような側面をさすのかについて、現地に行くことによってそれを実感し、併せて少子・高齢化時代のまちづくりのイメージを膨らませる。

■研修地・日程

- 9月8日 白老町企画政策課
町営バイオマス燃料化施設
山菜料理の店・グランマ
- 9月9日 日本製紙白老事業所
子育て支援団体・おたすけネット
高齢者支援団体・御用聞きわらび

写真キャプション ① バイオマス燃料施設のごみ収集場。② バイオマス燃料施設の設備の一部。③ グランマ外観。④ お助けネット取材風景。



【 総括 】

2部には地域研修は単位化もされていないため対象地域を決めて地域研修に行くという予定は立てていなかった。しかし、ゼミナールIをテキストに沿って読み進めていく中で、実際に地域に入って「肌で知る」ことが共通認識となり、ゼミナールとして地域研修に入ることにした。

ところで対象地域をどこにするかについて議論をした結果、学生からの要望として白老町という候補が挙がってきた。白老町は人口2万人程度の町であるが、かつては大昭和製紙(株) (現日本製紙北海道工場白老事業所) と旭化成(株)という大手企業が立地しており、町の基盤産業として成長に貢献してきた。しかし旭化成の工場は既に撤退し、日本製紙の工場も出荷額が大きく減少している。それに対して、白老町では人口減少、少子高齢化に対応するかのように多様な市民の自主的な活動が地域の活力を支える力ともなっている。このように、ハードな経済力とソフトな活動力が結合している町として研修に入ってみる価値があると考え、対象地を白老町に選定した。

ヒアリング、視察も上記のハードとソフトを代表する工場や団体を選んだ。前者を代表する日本製紙白老事業所で見学を行い、後者については商店街活性化を目的に置いた「グランマ」でヒアリングを行い、子育て支援団体「おたすけネット」と高齢者支援団体「御用聞きわらび」ではその活動のきっかけ、目的、活動内容についてヒアリングを行った。

まちづくりのハードとソフトの結合については理解が難しい課題ではあるが、実際に現地に入ってヒアリングをすることによって、まちづくりの多様な側面について理解が深まったのではないだろうか。

学生研修記

荒 悠己

地域経済学科 2年
伊達高校出身



増川 亘

地域経済学科 2年
札幌あすかぜ高校出身



「住民参画」を学べるまち 白老町

もともと私たちは、今回の地域研修以前に他の講義で白老町について学んではいました。ですが、それは第4次総合計画の内容や、それまでの過程についての話で終わっていました。そんな中、いざ地域研修で白老町を訪れてみると、私たちが学んでいた第4次総合計画についてはもちろん、その成果やその後の課題、現在行われている第5次総合計画についても学ぶことができました。特に、白老町で活動するNPO法人を訪問した際は、ある程度の知識として持っていた白老町の「住民と行政の協働のまちづくり」と「住民参画」の2つをより深く学ぶことができ、白老町への理解が深まりました。

今回の地域研修では、白老町のことをテキストでしか知らなかった私たちにとって、大きな刺激を与えてくれたのと同時に、実際にその地域に行くことの大切さを知ることができて、大変勉強になりました。

持続可能なまちづくりへの取り組み

私たちは地域研修で白老町を訪れ、白老町役場を初めとしてNPO団体や日本製紙工場などに対しヒアリング調査を行いました。調査では、住民の声を町の計画に反映させたまちづくりを実現しようと住民と行政が協力して行った計画作りの流れや、人口減少と高齢化が急激に進む町で起きている困りごとに対して行政の手では行き届かない部分をNPOと地域住民がカバーしていること、そしてかつて町のシンボルであり今でも産業の基盤である製紙工場がパブル崩壊から企業の統廃合を経てどのように変化したかということを中心に聴くことができました。直接白老に向き町の課題に取り組む方々に会うと危機感が強く伝わり、教科書では学べない白老のまちづくりに対する愛着や思いを聴くことができ、人と人のつながりが実感できる地域研修でした。

中園桐代ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数6人



中園 桐代

地域経済学科
教授

就職困難な若者の支援—札幌大通高校を事例として—

研修地：札幌市

【 研修目的 】

社会保障論ゼミでは、若者の自立の困難とそれに対する支援について考察を行った。北海道は高卒就職者が多い地域であることから、高卒未就職者への支援について検討を行った。しかしながら、実際に大通高校を訪問し先生方の話を聞くと、就職以前の問題として、学生の基礎学力や家庭の貧困、いじめ等多様な問題が存在している事に改めて気づかされた。このような困難を抱える若者、高校生に対して就職を見据えてどのような支援を学校で行うのかを考える事が研修の目的となった。

■研修地・日程

9月15日 札幌大通高校見学

【 総括 】

札幌大通高校は、単位制を導入し、午前部・午後部・夜間部の三部制を取ることによって、学生に多様な学びの場を提供している。いじめ等の理由で進学校から転校してくる学生、外国からの帰国生徒、障がいがある学生、家庭が貧困で基礎学力や生活習慣が身に付いていない学生等多様な学生に対し自立を目標に教育を行っている。

大通高校の特徴の第一は、貧困、家庭の問題やメンタルの問題を抱える学生に対して学外のカウンセラーを多数配置し、支援を行っていることである。第二に、家庭環境が厳しいため義務教育で身に付けるべき基礎学力がついていない学生のために『学び直し』の授業が開設されていることである。第三に、社会性を身につけるために地域社会との連携を取りながら授業を行っていることである。札幌市生涯学習総合センターの講座を市民と一緒に受けたり、イベントで自分たちがつくった蜂蜜を販売したり、地域の人々とプレゼンテーション大会を行ったりしている。

このような学校と地域の人々（＝地域資源）との連携によって、通常の普通科高校ではみられないようなきめ細やかな教育と支援を行うことが可能となっている。

学生研修記

白石 大祐

地域経済学科2年
北海学園札幌高校出身

三原 慎也

地域経済学科2年
旭川東栄高校出身

就労支援と中退者問題

今回私たち中園ゼミは就労支援や中退者の問題に対して着目し、研修先を大通高校にすることを決めました。大通高校では、独自の取り組みとして、ミツバチプロジェクトやユネスコスクールなどがありました。また、中退者を出さない取り組みとしては学び直しの授業というものもありました。これは、基礎的な学力が身につけてなく、授業についていけない生徒に、自分の進度に合わせて基礎的な部分を身に付けていくというものです。これらの取り組みにより、大通高校は定時制の高校の中でも中退者が少なくなっています。就職の面で見ても、学校側からの支援は手厚く、希望者に対しては卒業後も支援を続けている。これらの取り組みをすべての高校で行っていけば、現在起こっている、中退による学力の低下・それに伴う未就職という問題を解決することができるのではないかと思います。

若者の就労支援

今回私たち中園ゼミは、若者の就労支援というテーマで学習を進めてきました。大通高校の役目は、他校に行けば中退者になって社会保障を食いつぶす人をいかにして一人でも多くのタックスペイヤーに育てられるかが仕事です。そこで、中退対策として、学び直しの授業やカウンセリングなどが行われていました。様々な家庭環境の中で育っていたり、学校をやめて入学する者が多い大通高校にはカウンセリングが必要不可欠であるということがわかりました。大通高校と社会との繋がりとしてミツバチプロジェクトというものがありました。実際に高校と幼稚園との連携や地域イベントの参加や開発商品をオタムフェストで販売するなど実践されています。私たちは、大通高校での調査によって、いかにして中退者を減少させ、タックスペイヤーに育てることが大切だということがわかりました。

写真キャプション ① 教頭先生からの説明。② カウンセリングの予約ボード。③ 学生の休憩スペース。④ 見通せる職員室。⑤ 授業で作成した陶器。⑥ 学生が飼育したミツバチの蜜を販売する「ミツバチプロジェクト」の活動を知らせるボード。



西村宣彦ゼミ I・II・III

参加学生数30人



西村 宣彦

地域経済学科
准教授



都市と漁村の結合：平成大合併 10 年目の検証

研修地：函館市

【 研修目的 】

いわゆる「平成大合併」の道内第1号として、2004年12月に東部4町村（旧南茅部町、旧戸井町、旧恵山町、旧檜法華村）と合併した函館市。合併から丸10年を迎える今年、東部地域の住民が、合併以降の地域や行政の変化をどう感じているか73名の方に聞き取りを行い、合わせて近隣の方々にアンケート調査を実施した。

■研修地・日程

- 9月1日 函館市役所企画部ヒアリング
株式会社社目 工場視察
函館国際水産・海洋総合研究センター視察
歴史地区・函館山観光
- 9月2日 檜法華地区住民聞き取り調査
函館市縄文文化交流センター視察
南茅部地区住民聞き取り調査
反省ミーティング
- 9月3日 恵山地区住民聞き取り調査
戸井地区住民聞き取り調査
打ち上げBBQ
- 9月4日 まとめのゼミ&研修成果発表会

写真キャプション ① 聞き取り調査（檜法華地区）。② 函館市恵山支所視察。③ 聞き取り調査の移動中に。④ 聞き取り調査（戸井地区）。⑤ NHKニュースで「札幌の学生 函館の合併を検証」と紹介される。⑥ 最終日のまとめのゼミ。



【 総括 】

調査結果からは、合併当時と比べて、合併に対する懐疑的な見方がいずれの地区でも増えていることが明らかになった。合併以降の地域・行政の変化については、「行政サービスの質が高まった」「住民負担が下がった」「地域のイメージが良くなった」「住民主体の地域自治活動が活発になった」などの項目には否定的、「地域経済の衰退が加速した」「住民の声が行政に反映されにくくなった」などの項目には肯定的な見方が多かったと言える。総じて言えば、合併の効果や意義に懐疑的な見方が多かったが、個々の聞き取りでは「合併したのは正しい判断だった」「行政サービスがよくなった」といった肯定的な声も数多く聞かれ、学生には「住民の生の声の多様性」に触れられたことが貴重な経験となった。人口減や超高齢化への対応は、合併の有無に係らず多くの地域が直面している課題であり、地域と行政が連携し、住民主体の地域づくりを進めていく必要がある。昆布漁等でお忙しい中、お時間を割いて下さった住民の皆様、研修のコーディネーター及び市の公式の合併10年記念行事において調査結果の報告機会を与えていただいた函館市役所の皆様に、心から感謝申し上げます。（現地報告会の様子は29ページへ）

学生研修記

櫻澤 清美

地域経済学科 2年
北海学園札幌高校出身



志摩 麗太

地域経済学科 3年
旭川稜雲高校出身



合併後のまちづくりをどう進めていくか？

市町村合併は、効果が現れるのに10年程度の期間が必要と言われていることから、私たちは合併10周年を迎える函館市の4地区を訪問しました。直接訪れたことで、高齢化・過疎化が進み、閑散とした雰囲気から抱えている問題の深刻さを肌で実感しました。調査を通じて、住民の方々が合併後の現状に満足していないことがわかり、多くの課題が見つかりましたが、まちの将来のために「住民が自ら行動し、変えていかなければならない」と語る姿からは、郷土愛を感じ、地域のことを日頃から真剣に考えているのが伝わってきました。よりよい地域にするには行政と住民のコミュニケーションを強化し、住民主体のまちづくりを進めていかなければならないと思いました。合併は、合併するかしないかを判断することも重要ですが、合併後のまちづくりをどう進めてゆくかが最も重要なことであると学びました。

調査結果を市の行事で発表。貴重な経験に！

函館市と合併した旧4町村地域の住民の方への聞き取り調査とアンケート調査が、今回の研修のメインでした。聞き取り調査では、実際に軒一軒住民のお宅を回り、合併10年後の地域の変化や地域住民の生の声を聞きました。たくさん話を伺いましたが、合併後、行政との心理的な距離が遠くなったと感じている方が多いという印象を受けました。12月には函館市の合併10周年記念シンポジウムで、今回の調査結果や今後に向けての私たちなりの提案を、行政でも住民でもない学生の立場から述べる機会をいただきました。とても貴重な経験になるとともに、私たちの調査結果を少しでも地域に還元することができ、うれしく思いました。地域の衰退を時代の流れとしてそのままにするのではなく、現実の問題として受け止め、解決に取り組んでいくために、行政と住民が互いに歩み寄り、距離を縮め、信頼関係を構築していくことが不可欠と感じました。



平野研ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数22人(院生1人)



平野 研

地域経済学科
准教授

陸別町におけるフェアトレード商品を使った地域振興

研修地：陸別町

【 研修目的 】

陸別町において、フェアトレード商品を使った「まちチョコ」「鹿ジャーキー」という地域振興商品開発が2013年から始まった。この取り組みについて調査を行うことが本研修の目的である。本研修の手法はインタビュー調査と、町民アンケート調査に二つによって行われた。

■ 研修地・日程

- 7月4日 陸別町長インタビュー
陸別町加工研修センター、陸別振興公社訪問
陸別中学校、まちチョコ会議インタビュー
- 7月5日 陸別ブランド会議、陸別観光協会インタビュー
銀河の森天文台訪問
町民アンケート実施
- 7月6日 地域おこし協力隊：秋庭氏インタビュー
ふるさと銀河線りくべつ鉄道訪問

写真キャプション ① 陸別町長を囲んで。② アンケート調査風景。③ ふるさと銀河線に乗車。④ 地域おこし協力隊秋庭氏に聞き取り調査。⑤ 鹿ジャーキーの調査。⑥ 銀河の森天文台での調査。



【 総括 】

フェアトレード商品を地域振興に使った陸別町の取り組みは、国際貢献と地域振興を結びつけた新たな取り組みとして全国的に注目を集めている。その取り組みがスタートした経緯とその成果について調査を行った。フェアトレードについての学習を進めるとともに、インタビュー調査では関係団体に事前に質問項目を送り、アンケート表の作成に事前学習を行った。

陸別町の地域おこし協力隊・秋庭氏の協力を得て、関係団体の方たちにインタビューすることができた。初めてのインタビューで緊張をして十分な聞き取りが出来たとは言えなかったが、その後も連絡を取りメールなどを通じて調査の充実を図って来た。アンケートでは積極的に町民に話かけ、多くの調査票をまとめることが出来た。多くの住民の協力を得ることが出来、充実した調査を行うことが出来た。研修終了後には、それらの結果について検討し、考察を行っていった。

銀河の森天文台やふるさと銀河線などの施設の見学でも、陸別町の地域振興の政策についても知見を広めたりと、今後も陸別の地域振興とフェアトレードの関係を定点的に観察していく礎となる研修であった。

学生研修記



宮下 諒

地域経済学科2年
札幌創成高校出身

フェアトレードで地域活性化へ～陸別町

私たち平野ゼミは、7月4日から6日にかけて陸別町に行きました。人口は約2,500人と決して大きな町とは言えません。しかし、フェアトレードを通じた地域活性化や結びつきを図っていると知り、私たちは同町で地域研修を行うことにしました。

同町の活動として、フェアトレード商品のチョコレートに地元の人が撮った写真をパッケージにすること(まちチョコ)や、鹿肉ジャーキーの包み紙の文字を地元の書道家に書いてもらっています。そして、これらを陸別ブランドのお土産として販売することで地元から道内、全国へと流通し地域活性化に繋がることを学びました。さらに、まちチョコに関しては輸入品を使っているため、地元だけではなく海外も多少なりとも潤うことになります。これらの活動が成果を挙げることで、フェアトレードに関心を持つ人がさらに増えていくのではないかと私は思いました。



郡司 恵里

地域経済学科3年
恵庭北高校出身

陸別町でのフェアトレード活動と地域おこし

平野ゼミでは、フェアトレード活動による地域おこしの可能性を探るために、7月に陸別町に行ってきました。陸別町では、フェアトレード商品をまちの特産品として販売しています。この特産品である「まちチョコ」と「りくべつ鹿ジャーキー」について、アンケート調査や聞き取り調査を行いました。

調査の結果、まちチョコや鹿ジャーキーは、現在のフェアトレードの課題である認知度上昇につながっていることがわかりました。また、これらは、陸別町らしさを表現する特産品として他の街との差別化を図った新しい地域おこしにつながっていることがわかりました。そのため、今回の地域研修で、フェアトレード活動と地域おこしを結びつけることに新しい可能性があると感じることができました。また、これからのフェアトレード活動や地域おこしにおける課題を考えていくうえでも、いい経験になりました。



古林英一ゼミ I

参加学生数 12 人



古林 英一
地域経済学科
教授



サケ漁業と地域 HACCP の取組

研修地：標津町

【 研修目的 】

サケは国際的な商品であるとともに、北海道水産業を支える重要な漁業である。標津町ではサケの品質向上による価格の維持・向上をめざし、生産・加工・流通にわたって、地域ぐるみの衛生管理をおこなっている（地域HACCP）。本研修では、サケの生態・漁労・加工にわたり、実際の作業を体験しながら、北海道の重要な地域特産物であるサケ漁業と地域HACCPの取組を理解することを目的としている。

■研修地・日程

- 10月2日 標津サーモン科学館
- 10月3日 マ印神内商店
笹谷商店
サーモン科学館
- 10月4日 定置漁業乗船実習

【 総括 】

本学の学生の殆どは道内出身であるにも関わらず、サケの遡上すら見たことのない学生が大部分である。また、魚をさばいたことのある学生もわずかである。

本研修では、マ印神内商店で、なじみ深い製品であるイクラの製造工程を見学し、実際に作業の一部を体験させてもらうことで、現代の水産加工業の実態と衛生管理の重要性を理解できたと思われる。また、笹谷商店では新巻鮭の製造をおこない、サケの加工についても学べた。

また、標津サーモン科学館では、町役場水産課の担当職員から、地域HACCP導入の経緯や地域HACCP導入によってもたらされた効果を学び、サーモン科学館館長からサケの生態や生物的特性などについて、解剖実習を交えて学習した。最後に定置漁業の網起こし作業に同行させてもらうことで、実際の漁労現場を体験することができた。漁船に乗るといった体験は、殆どの学生にとっては初めてであり、おそらく将来も体験することは殆どないであろうと思われる。

北海道を代表する産品であるサケを、単なる知識としてだけでなく、自らの体験として学んだことは、将来、様々なところで活躍するであろう学生たちにとって、得がたい経験になったと思われる。

学生研修記

岩鼻 陽太郎

地域経済学科 2年
旭川実業高校出身



河田 航輝

地域経済学科 2年
岩見沢東高校出身



地域研修を終えて

古林ゼミ I では、地域研修で道東にある標津町へ行き、サケについて色々なことを学んできました。標津町は漁業が盛んで、特に昔からサケ漁が全国的に有名な町です。標津町では、サケが獲れてから消費者のもとに届くまでの品質管理を徹底する地域HACCP という安全食システムを地域全体で取り組んでいて、実際にサケの加工や、サケの定置網漁業を間近で見学させていただいた際に、サケの温度管理や衛生管理を厳しく行っているのを見ることができました。また、サケの人工授精体験の際は、メスのサケの卵を取り出し、オスのサケの精子をかけて受精させるという体験を実際にさせていただきました。その他に、サケから内蔵を取り出し塩漬けにする、新巻ザケづくりも体験することができました。今回の地域研修では、普段なかなか体験できない多くの貴重な体験をすることができました。

地域研修での貴重な体験

私たちは漁業の盛んな町標津町に行きました。そこで鮭についての講義、いくら加工、人工授精体験、漁の見学等を行いました。講義の中で「地域HACCP」について学びました。これは、漁から市場まで衛生管理等を徹底し、消費者に「安全・安心」を届けるという標津町の地域水産業界の連携による取り組みです。そのため、標津町で獲れる鮭は全国的にも良品質で高級品とされています。この衛生管理はいくらの加工を見学させていただいた「神内商店」でも見られ、加工場に入る前の手や衣類の消毒等様々な工程がありました。人工授精体験では、卵を取り出し重さを量り、精子をかけて受精させる事を体験しました。最終日には漁船に乗せていただき、定置網漁法での漁を間近で見学させていただきました。どれも一生に一度あるかどうかという貴重な体験ばかりだったので、とても良い経験になりました。

写真キャプション ① 加工場見学。② 水産加工業体験。③④⑤⑥ 新巻製造実習。⑦ 乗船実習。



古林英一ゼミ II

参加学生数9人



古林 英一

地域経済学科
教授

日高地方における軽種馬の生産・育成・流通

研修地：浦河町・新ひだか町・様似町・日高町

【 研修目的 】

サラブレッドは北海道の地域特産物であり、日高地方はサラブレッドの生産地としては世界有数の規模をほこる。生産牧場で生まれたサラブレッドは、育成・調教過程を経て、競馬で供用され、さらに繁殖馬として牧場に戻ったり、乗馬として供用される。この研修ではその全過程を見学・体験することで、北海道ならではの経験を積むことを目的としている。

■研修地・日程

9月8日	ポロシリ乗馬クラブ 日高軽種馬農協 北海道市場
9月9日	JRA日高育成牧場 高村牧場（様似） 門別競馬場

【 総括 】

北海道が馬の産地であることは大部分の学生が知ってはいるが、産業現場から馬が消えさった時代に生まれ育った彼らの多くは、馬を見たこともなければ触ったこともない。馬だけではなく、牛も含めて大家畜を触ったこともない学生が殆どである。

サラブレッドが競走馬として供用されるまでには、育成・調教過程や流通過程が不可欠であり、日高地方にはこうしたインフラストラクチャーが集積し、さらに、生産をサポートする専門農協である日高軽種馬農協も存在する。

本研修においては、今後、全国で活躍するであろう学生が、北海道の地域産業のひとつであるサラブレッドの生産・育成・流通、そして競馬や乗馬といった全過程を身をもって体験し理解することができたと思われる。

様似町の高村牧場では、厩舎作業を体験することで、大家畜の飼養が決して簡単なものではないことを実感できたであろうし、ふだんテレビなどでは見ることのできない競馬の裏側で公正競馬確保のために多くの工夫がなされていることも知ったであろう。さらに、乗馬を通じて馬という動物を肌で感じるとともに、引退した馬も産業的に利用されて、おり、生産から、育成・調教、市場、競馬、そして乗馬といった諸産業が有機的に連関していることを理解したであろう。

とかくネット情報に左右されがちな学生たちにとって、単なる情報や映像ではなく、リアルな体験ができたことは有意義であったといえよう。

学生研修記



1



2



3



4

酒井 直人

地域経済学科3年
北海高校出身

山崎 紗由美

地域経済学科3年
留萌高校出身

日高のサラブレッド生産

古林ゼミIIでの今回地域研修で訪れた場所は、サラブレッドの生産や育成などで有名な日高支庁です。日本は世界的に見てもサラブレッド競争馬生産国で、サラブレッドの生産は世界有数、さらに日高での競争馬の生産は国内の生産の約8割を占めるほどです。

今回の地域研修でも、古林ゼミの”身をもって体験する”という1つのテーマに沿って、実際に馬小屋の掃除や放牧など、牧場を営むための仕事の一部を体験させていただき、身をもって牧場を営む方々の仕事の大変さを体感しました。この研修の過程の中で実際に仔馬に触れたり、乗馬などをして馬という動物の生態などを知り、育成所や競馬場では実際にレースなどで競争馬が走っている姿をみることができました。そこには自分の思っていた以上の面白さや驚きなどもあり、とてもよい体験ができたと感じています。

サラブレッドの生産・育成

私たち古林ゼミIIは、国内のみならず世界でも有数の馬産地である日高地方を訪れました。そこで、生まれた馬がどのようにして競走馬としてレースに出るのか、引退した後はどうなるのかといった一連の流れを学びました。1日目には乗馬体験、市場施設の見学やサラブレッドの流通について教えていただき、2日目は調教施設の見学、生産牧場での体験実習を通じてサラブレッドの育成について学びました。最後に訪れた門別競馬場でレースを見たときはここにたどり着くまでに多くの人が支えてきたのかと思い、競馬に対しての印象ががらりと変わりました。今回の研修でサラブレッドの一生はさまざまな人たちが携わっているということが分かりました。今後は後継者不足などの問題をどのようにして解決していくかが課題となりそうです。また、馬の放牧や厩舎の清掃といった牧場での作業、乗馬など初めて体験することばかりで記憶に残るいい思い出になりました。

写真キャプション ①乗馬実習。②③高村牧場で体験実習。④門別競馬場で。

水野邦彦ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数21人



水野 邦彦

地域経済学科
教授



北海道開拓当初の囚人労働を学ぶ

研修地：月形町

【 研修目的 】

「北海道の和人の歴史は流刑囚から始まる」といわれるとおり、移住民や屯田兵が入植するに先立って開拓の基礎整備にあたったのは囚人たちであった。過酷を極め非人道的であった囚人労働の実態を学ぶべく、ゼミでは月形樺戸博物館（旧樺戸集治監）を訪れた。

■研修地・日程

9月20日～9月21日

篠津山霊園（囚人墓地）
月形樺戸博物館（旧樺戸集治監）

写真キャプション ① 囚人墓地の慰霊碑。② 月形樺戸博物館の内部。③ 囚人用の丸太枕。④ 囚人用の赤い服の前で。⑤ 宿舎での夕食。



【 総括 】

北海道最初の監獄である月形町の樺戸集治監は1881年に開設された。囚人の基本的労働は開拓の基礎整備や農地開墾であり、屯田兵屋400戸のうち300戸を建設したのも囚人であったが、やがて河床・橋梁・鉱山などの土木工事に囚人が駆りだされた。月形町は開拓景気で、札幌か月形かというほどの賑わいをみせたという。

樺戸集治監は延べ46,722人を収容し、囚徒の食糧の自給自足をはかり、味噌醤油を醸造した。囚徒は赤い服を着て、名前ではなく番号で呼ばれ、夏季は10時間半、冬季は7時間の労働が課せられた。入浴は、6月～9月は5日に一度、10月～5月は10日に一度と定められていたが、水不足でじっさいには20日に一度であったという。

当別道路・峰延道路（月形～市来知）・上川道路（忠別道路）・増毛道路、さらには網走・釧路などにいたる入植道路ないし産業道路の建設に囚人が投入された。のちに人道的配慮および近隣の治安維持のために外での囚人労働は廃止され、過酷な土木工事はタコ部屋労働に移された。

ゼミ一行は無縁仏の墓標が立つ囚人墓地に寄ったのち、月形樺戸博物館で展示物を見学しつつ、同館名誉館長で郷土史家の熊谷正吉さんの説明を聞いた。



月形樺戸博物館名誉館長の熊谷正吉氏にお話を伺う

学生研修記

中寺 香里

地域経済学科2年
札幌北陵高校出身



多数の死者を出した囚人労働

私は北海道開拓が屯田兵によってなされたという中学高校の知識しかなかったので、研修前は囚人のことなど想像もしていなかった。

月形町ではまず囚人墓地を見た。すごい数のお墓があり、こんなにも囚人がいて、こんなに大勢が死んでしまったのか、と驚いた。病死や事故死は1,046名、このうち1,022名が無縁仏となり、この囚人墓地に眠っているという。

夜明け前に叩き起こされた囚人たちは、逃亡防止のために二人一組の連鎖をかけられ、ピストルで威嚇されながら労働した。金子堅太郎という人物は「囚徒らは道徳にそむいた悪党であるから懲罰として苦役させる。そうすれば工事が安く上がり、たとえ死んでも監獄費の節約になり、一挙両得である」という意味の主張をしたそうだ。

ひとつの町にもこれほど深い歴史があるのなら、北海道全体ではどれだけの歴史があるのだろうか。

岡田 雄平

地域経済学科3年
士別翔雲高校出身



忘れられた北海道の歴史

去年の地域研修で朱鞠内のタコ部屋労働を学び、今年は北海道入植の素地をつくった囚人労働を学んだ。二度の地域研修で、北海道の歴史が単純でないことを考えさせられた。まさか政治犯や凶悪犯が道路や水路をつくっているとは思わなかったし、これほど厳しい環境で働かされているとは思わなかった。囚人労働の実態を知ることは驚きの連続であった。

そもそも北海道でいち早く監獄開拓がおこなわれていたことが強く印象に残った。北海道は屯田兵が一から開拓していったと思こんでいたからである。北海道の歴史を広く北海道民が知るために、小中高校でしっかり教えることも一案だろう。

熊谷正吉さんのお話を聞いて囚人の様子を知ることができたし、もっと知りたいと思うほどであった。ゼミの仲間たちも説明を聞くのに集中していて誇らしかった。

宮入隆ゼミ I

参加学生数8人



宮入 隆

地域経済学科
准教授

総合産地・富良野市農業の現状と課題

研修地：富良野市

【 研修目的 】

本研修では、富良野市を事例に北海道農業の抱える課題を明らかにすることを目的とした。コメの生産調整以後、野菜生産を中心に「総合産地」として展開してきた富良野市農業について、自治体やJAの役割、法人化・加工事業・直売所の意義といった側面から理解を深めた。

■ 研修地・日程

9月3日	富良野市役所経済部農林課
9月4日	JAふらの本所、野菜集出荷施設 (株)天間農産本舗 (スイカ生産者)
9月5日	ファーマーズマーケット・オガール 富良野チーズ工房

写真キャプション ① 富良野市役所にて。② JAふらの本所にて。③ JA集出荷施設。④ 天間農産本舗での調査。⑤ 直売所オガールでの売り場調査。⑥ ワイン用ぶどう畑。⑦ 富良野チーズ工房でチーズ作りを体験。



【 総括 】

富良野市では労働力不足が顕在化し、野菜産地としての維持が困難になっている現状にあった。従来は基幹品目であった重量野菜の生産が減少し、軽量でより高収益が望めるミニトマトなど施設園芸へのシフトが進む一方、機械化により大面積を耕作できる小麦の生産拡大という形で、集約化と粗放化への二極化が進展していた。

その中で、自治体では農業支援策として担い手育成を最重要課題として取り上げていた。また、JAでは、従来は農業者が負担していた収穫後の作業を代行するなど集出荷施設を拠点に作業軽減を図り、さらに、加工事業により高付加価値化の度合いを高めていた。他方で、全国一の規模を誇るスイカ生産法人では若者を多数雇用し規模拡大を進め、新たな農業経営のあり方を示しつつ、地域貢献への思いを語っていたのが印象的であった。

チーズ加工から出発し、観光施設へと多角化を進める富良野チーズ工房では、自治体主導の加工事業を起点に、農業と観光を両輪として地域活性化を図る可能性が示唆された。また、JA直売所視察では、「地域のアンテナショップ」として機能するだけでなく、有機農業実践者など従来はJAと距離を置く生産者に対し、新たな活躍の場を提供していたことも興味深かった。

学生研修記



有波 葉里

地域経済学科2年
江別高校出身

小野寺 勇太

地域経済学科2年
北見柏陽高校出身

総合産地だからこそ抱える課題と可能性

宮入ゼミは、富良野市農業の現状と課題をテーマに調査を行いました。富良野市は基幹品目である野菜のほかにも畑作、水稲作、畜産が複合的に組み合わされています。なかでも野菜生産は労働力の負荷が重く、価格変動の影響が顕著に現れるため、産地維持は想像以上に困難であることが分かりました。労働力不足は深刻化しており、現状打破が不可欠である状況です。他方で、野菜の主力品目の切り替えやJAによる支援、ワインやチーズに代表される自治体主体での加工事業に加えて、総合産地という地域特性を生かしたオムカレーの開発など、先進的取り組みが富良野市農業を支えています。実際に現地に赴き、市役所やJA、農家で聞き取り調査を行うことで、生産、加工、流通といった多面的な視点で富良野市農業の可能性を熟考できたと感じています。

富良野市で垣間見た農業問題の根深さ

私たちは、野菜生産と加工事業の先進地域である富良野市へ研修に行った。その中で、最重要な課題はやはり担い手の確保・育成であることを強く感じた。

特にJAふらのでは、従来は踏み込まなかった農家の作業を一部代行しつつ、農家の負担を減らし、取扱品目を少量に絞らずに個々の農家のニーズに合った作物を取り扱うなど、農家支援に尽力していた。しかし私は、これで本当に北海道農業の未来はあるのだろうかと感じた。JAふらのが様々な取り組みを行っているとしても、それは本来市場から退出すべき農家を引き止めているだけではないのか。経営的に厳しい農家までもを引き止めておく現在の状況で、農業に魅力を与えることができるだろうか。日本で有数の先進的な農協であっても、より厳しく「ビジネスとしての農業」の確立について考えなければ、農業の未来はないのではないかと思われた。





山田 誠治
地域経済学科
教授



新たな展開をめざす函館の観光の取り組みを理解する

研修地：函館市

【 研修目的 】

新しい観光計画のもとで、様々な取組をしている函館の観光の現状について、政策の意図、思い、ねらいを理解しながら、実際に現場を見て、観光客や従業者にインタビュー調査を行い、函館が計画している観光のまちづくりは、その到達点と課題について探求すること。

■研修地・日程

- 9月16日 元町ベイエリア探索
函館山ロープウェイ見学
元町地区まち歩き
- 9月17日 函館市役所観光振興課説明
函館市地域交流街づくりセンター訪問
グループ別インタビュー調査 [元町・ベイエリア×2、五稜郭エリア・湯川温泉エリア]
- 9月18日 自由行動

【 総括 】

今回の研修は、観光で到達点の高い函館を訪問し、市の新しい観光計画のもとで、どのような課題があり、どのように取組を進めているのか、について調べ、学生の理解は深まったと思う。

既に、函館の食を生かした観光の売り込みについては有名であるが、新しい打ち出し方や地元食材を活かしての展開なども発見したようである。また、観光客や地元の観光関連業の従事者からのインタビューからは、街並みの美しさ、食の充実、多彩な楽しみ方が工夫されている、などの感想を聞いてきたが、逆に、夜のお店の営業時間が短い、移動手段が少ない、回る場所が限られている、など函館市が考えている課題が指摘されていたことも確認したようである。

あるグループは、函館に来た観光客と一番初めに触れ合うタクシーの運転手さんが、観光客のために函館に関する様々な資料を持参し、接客を充実するために努力しているという話を聞き、また飲食店のおばちゃんからは楽しい語らいができる出会いを経験してきている。北海道新幹線開業に向けて課題はあるが、市全体で観光客を迎えようとしている経験をし、市役所で説明を受けたサービスの理想を体現していることも実感したようであった。

学生研修記

小川原 岳
地域経済学科 2年
札幌平岸高校出身



誇り高い函館市民の力に期待する

今回の函館訪問では、私は五稜郭でのインタビュー調査を担当した。市が追求している宿泊滞在日数を増やすという点では、インタビューをした観光客の動向からはまだまだ十分ではない結果だった。移動手段が市電で便利なことも関係あるのかもしれないが、五稜郭という素晴らしい建造物を生かし切って、もっと地元民が観光に協力するべきではないかと感じた。また「おもてなし精神」を発揮する事も必要で、観光に対してまだまだ発展途上であるといった厳しい意見も多かった。これだけの観光材料が揃っているにもかかわらず、それを持ち腐れにしているのは勿体無いと思った。

函館市民は市への誇りが高いように見え、他の市には負けてないという視点の人が多かったのが印象的だ。新幹線が通ってからの函館の観光がどう変わるのかこれからは楽しみである。

木村 祐花
地域経済学科 2年
札幌あすかぜ高校出身



体も心も温かくなった湯の川温泉

函館の街の印象は、海がきれいで色鮮やか、坂も街の魅力を牽き出していると思いました。函館市地域交流街づくりセンター館長の丸藤さんのお話はあまり多く聞けなかったですが、食べ物から行政のことまで幅広い質問にぱっと答えられたのにはすごいと感心しました。街の情報発信の真髄の一端を見た感じで、私も街のことをよく知りながらの観光を実践してみたいという意欲が湧きました。

私が担当した湯の川方面の4人の調査チームは特技を生かし温泉調査。やはり温泉旅館の作り方として、入浴しながら景色がうまく観られる工夫や、地元函館の人にとっても貴重な社交の場となっていました。函館の人は本当に温かく、おしゃべりな三色団子のおばあちゃん、ばってらのお母さん、300円塩ラーメンの歴史を話してくれた奥さん・・・観光客への親切な対応で体も心も温かくなった探索調査でした。

写真キャプション ① ここも有名な食の拠点です。② ラッキーピエロも食の観光の目玉です。③ ベイエリアで外国人観光客にインタビュー。④ 海を生かした観光も。⑤ やはり美しい夜景。⑥ 函館市から観光政策を学ぶ。



山田誠治ゼミⅡ

参加学生数 11 人



山田 誠治

地域経済学科
教授

湯布院（由布院）と別府という対照的な温泉街から学ぶ

研修地：大分県由布市・別府市

【 研修目的 】

札幌と比較して温泉を活用した観光のまちづくりに成功している、大型の施設に頼らない観光のまちづくりに成功した由布市と対照的な別府を訪問し、ヒアリング、インタビューなどを行って、その要因・背景・北海道が学べることについて、現地調査を行う。

■ 研修地・日程

9月8日	ゆふいんフローラハウスで経営者の安藤さんより、まちづくりの解説を受ける 由布市内を探索調査
9月9日	由布市街をグループ別にインタビュー調査 別府市内観光施設現地調査
9月10日	別府市観光協会から解説 別府市内各温泉へ現地訪問・インタビュー調査
9月11日	福岡市内観光地自由行動

【 総括 】

湯布院と別府という対照的な2つの温泉地を比較という視点から、実際に調査をし、学生は様々なことを学ぶことができたと思う。

まず、街の構造とそれに見合った観光の取り組みへの気づきである。湯布院は目立った観光スポットこそないが、いつ来ても新鮮なその季節ならではの楽しみを見つけられる構造、そして、リピート率が高いのも頷ける細やかに作られたまちだと実感した、とある。別府は源泉量国内一位の強みを生かし、温泉を前面に押し出した観光政策を行っている施策の話を聞き、随所にその工夫を発見してきた。

別府全体のイメージとしては、商業生活圏の中に観光スポットが点在し、まとまって発展しており、街中に点在する温泉スポットやある一部の地域にまとまってある温泉街など、観光地が多くそれぞれが離れてあることをどう生かすか、が課題であり取組をしていること、また有名な温泉スポットであっても現在市民に利用されるぐらい大衆であること、を見出している。

「まちづくりと聞くと上が動いて私たちが受ける、と考えがちなのに対し、住民の地元愛から、地域の課題解決という問題意識を持つことができたと思い、彼らの今後の地域への視線の変化に期待したい。

学生研修記

浅田 健太

地域経済学科3年
旭川龍谷高校出身

寺田 早紀

地域経済学科3年
岩内高校出身

温泉資源をうまく活用したまちづくり

地域研修に行って思ったことは、地域ブランドのあり方に大きな違いがあり、北海道と違い温泉という1つのもので地域を活性化させようとしている湯布院、別府はすごいと思いました。

湯布院は自然豊かで空気もおいしく、観光客にとっても落ち着いた雰囲気の中、空気がいい、過ごしやすいなど、やはり湯布院の背伸びをせず地域の資源を生かすという良いところを上げていました。また、街並みなどには感動し、また行きたいと思えるようなところでした。

別府について印象に残ったのは、動物園もどきの地獄めぐりです。私自身が想像していた地獄めぐりとは違い、温泉に加え動物のほうにも目が行く工夫がされていたが、調査日程の関係もあり、もう少し他の温泉も訪れたかったです。

全体の感想として、それぞれの都市が資源と特徴を生かしたまちづくりをしているという経験ができたと思いました。

湯布院と別府という対照的な温泉地かせ学ぶ

どちらの温泉地を見て感じたことは、何かのマネをせず、それぞれの土地に合ったまちづくりを追求し、土地ならではの環境や資源を生かしての取り組みをしているということだ。

湯布院は静かで小さな情緒あふれる町であり、それを求めてホッとした心の落ち着きが得られる観光地で、フローラハウスの安藤さんご夫妻より伺ったのは、まちの人と人との繋がりを大切に、町全体で湯布院を守ってきた取組の結果だそうで、実際1日で歩けるコンパクトな町に、地域の食材を使った料理やお菓子、ひっそりとした場所にたたく温泉旅館が数多く見受けられ、チェーン店などは無く街並みはきれいに整備されていた。

別府は、温泉は源泉数、湧出量とも日本一で、その魅力を最大限に伝える町づくりを展開し、市内の温泉情報が掲載されている「温泉本」や「スパポート」など、市全体を生かした取組には感心した。



写真キャプション ① 美しいフローラハウス。② 駅前で湯布院の観光客にインタビュー。③ 湯布院には地元産焼酎銘柄がたくさん。④ 歴史的な竹瓦温泉。

現地報告・発表

●西村ゼミ「～合併10周年記念フォーラム～函館市東部4地域のあゆみとこれから」での報告 2014.12.1 函館市恵山コミュニティセンター



●大貝ゼミ I 「インカレねむろ・大学等研究プロジェクト2014 研究発表会」 2015.1.24 別海町マルチメディア館



北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2014



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

2015年3月発行

制作:(株) ロボット